長岡開府四〇〇年のあゆみ

長岡開府四〇〇年のあゆみ

表紙説明

水島爾保布画「昔の長岡十二ヶ月の中 六月 蔵王大祭囃屋台」の図
（長岡市立中央図書館所蔵）

江戸時代、旧暦の6月15日は蔵王大祭で長岡の町は賑わった。この図は前日の6月14日の蔵王大祭宵祭に長岡18か町から繰り出されるなかの神田町のひときわ目立つ大船屋台を描いたもの。
図中の帆船形が特徴でなかに神田囃子を奏でる氏子が乗っていた。神田の大船屋台は翌15日の大祭の際には18か町の先頭となって、大手門から長岡城内に入った。見物の武士、農民、町人たちが一緒に祭を楽しむ様子が描かれている。

凡例

・『長岡開府四〇〇年のあゆみ』は、平成30年（2018）の長岡開府400年を記念して、長岡市域の主な歴史と文化を年表と図版などで紹介する。
・本文の記述は、原則として常用漢字および現代かなづかいを使用したが、固有名詞や専門用語については、必ずしもこの原則によるものではない。
・年号の表記は、原則として和暦を用い、適宜西暦を（　）で併記した。
・読みにくい固有名詞や歴史用語は、必要に応じてふりがなを付した。
・本文中には、差別的な用語や表現を使用している場合もあるが、これは史実に基づいて客観的に研究する立場から使用したもので、これらの差別を容認するものではない。
・人物に対する敬称・敬語は、原則として省略した。外国人名はカタカナで記した。
・本書の性格上、必要な場合を除き、本文中には具体的な根拠を示さなかった。主な参考文献は、巻末に示した。

長岡開府400年
ROOTS 400 越後長岡

長岡開府四〇〇年のあゆみ

目　次

長岡開府四〇〇年のあゆみの発行によせて …… 4

Ⅰ．長岡開府と長岡藩主牧野家
常在戦場の精神を受け継ぐ　長岡藩主牧野家十三代の治世二百五十余年…… 6

Ⅱ．プロローグ　長岡のあけぼの
火焔土器・八幡林遺跡・長尾景虎…　長岡の個性が生まれる …… 8
堀氏から牧野氏へ　長岡開府の前夜…… 10

Ⅲ．ふるさと長岡四〇〇年のあゆみ
市民協働の萌芽　長岡城の完成　（1618-1700）…… 12
雨龍の殿様の登場　今につながる文化・教育・産業　（1701-1800）…… 14
激動の長岡を力強く生きる　自然との共生　（1801-1868）…… 16
ムラを支えるリーダーの胎動　義民の面影を各地域にみる　（1618-1800）…… 18
地域の宝のルーツ　北前船・牛の角突き・良寛　（1801-1868）…… 20
北越戊辰戦争　激しい戦火と灰燼に帰した長岡　（1868）…… 22
敵と味方の北越戊辰戦争　各地域の戦禍とその傷跡　（1868）…… 24
米百俵の精神と国漢学校　未来をつくる、人をつくる（1869-1870）…… 26
殖産興業への道程　歯をくいしばる明治の長岡人たち　（1869-1911）…… 28
長岡名所を全国発信！　絵葉書にみる大正モダン長岡　（1912-1926）…… 30
日本海と太平洋は長岡が結ぶ　博覧会にかけた夢　（1927-1945）…… 32
長岡空襲の記憶　昭和二十年の夏を忘れない　（1945）…… 34
高度経済成長の時代が到来　戦後復興と連続する自然災害との闘い　（1946-1975）…… 36
開通！高速道路と新幹線　高速交通網の広がり　（1976-1988）…… 38
地域の個性が奏でる豊かなハーモニー　復興と振興、その先の未来へ　（1989-2018）…… 40

Ⅳ．エピローグ　新しい米百俵
次の百年へ　新しい米百俵　未来へ向けた人づくり・まちづくり…… 42

付編　長岡市年表 …… 44

主な参考文献…… 48

長岡開府四〇〇年のあゆみの発行によせて

私を含め皆様はふるさとのほんとうの姿を知っていますか。自然や歴史・市民生活・民具・民俗・産業考古などに隠れた美しさが、充満しているふるさとを。私たちの住む信濃川中流域の悠久の大地をふるさとと称しています。そこに住んだ私たちの祖先は、あらゆる知恵を駆使して創造を生みつづけてきました。平和も戦争も、災害の受難も享受してきました。それがゆえに人の個性も無意識のなかに埋没していたのかもしれません。しかし、よくみると、隠された個性が長岡の歴史や生活のなかにキラキラと輝いていることを発見します。今年は開府四百年です。戦国武将の牧野氏が入封して、いままで息づいてきていた城下町に常在戦場の精神を根づかせています。サムライも農民も商人たちも、その価値観で生活を創造させてくらしてきたといえましょう。江戸期における長岡の産業都市のイノベーションも、常在戦場の精神から生まれていると いって過言でないと思います。

そして、人づくり教育の米百俵の精神や互尊思想は、戦災や天災を乗り越えてきた長岡の人びとの魂といっても良いでしょう。

近隣の市町村と合併をくりかえし、地域の宝が長岡に入ってくるたびに、長岡の文化性が高まっています。異なった個性が交じり合い新しい共生が始まります。矛盾を同居させた文化は、多様性を生んでいます。

このように新しい思想を創り出してきた長岡の人びとの本当の姿を、二〇一八年に長岡に住む人びとは知って誇りに思うことが大切です。それが私たちのふるさとを創ってきた人びとの祖霊に対する感謝の気持ちだと思います。

この小誌は長岡の歴史を学ぼうとする若者たちが手づくりで編んだものです。図版と簡潔な説明で、開府四百年の記念誌にしようと志したものです。

技術革新が急速に進展する現在、世の中の何が変化しているのか、どのように変わっていくのか、私たちがしっかりと把握しながら、この変化に対応していく必要があります。

米百俵の精神が息づく長岡として、次の百年を作り出す人材と産業を育成するとともに、将来のための投資を「新しい米百俵」として積極的に行ってまいります。

未来を切り開く若者たちとそれを支えてくれる市民の皆様の勇気と知恵をもって、次の百年に向けて新しいスタートをきりましょう。

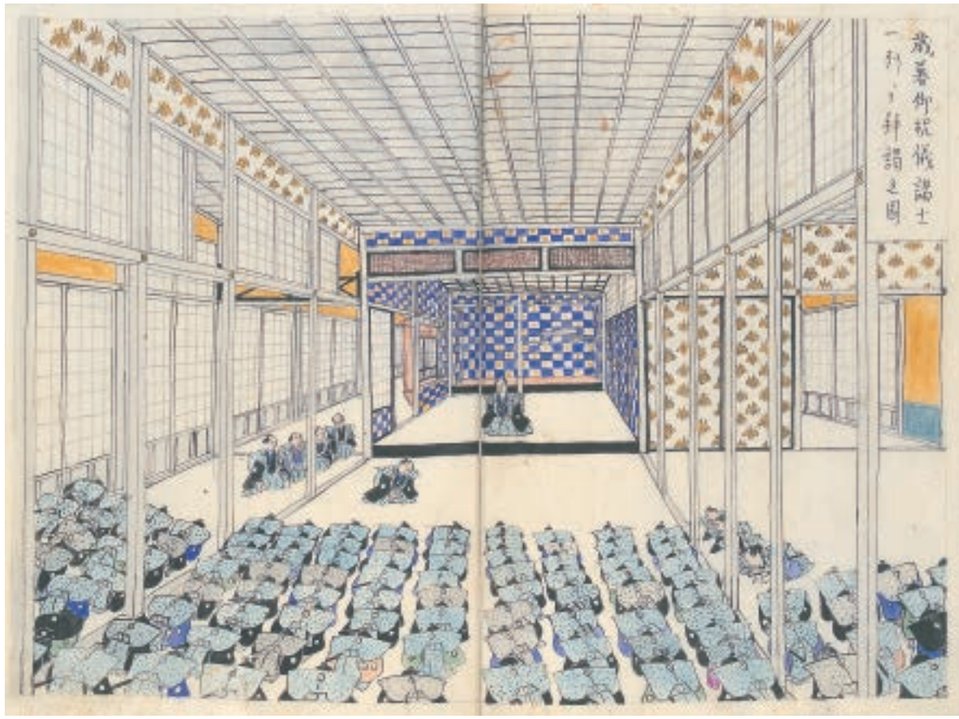
本書の発刊に御協力をいただいた多くの皆様に心から感謝申し上げます。

平成三十年（二〇一八）五月

長岡開府四〇〇年記念事業実行委員会　会長　磯田　達伸

常在戦場の精神を受け継ぐ
長岡藩主牧野家十三代の治世二百五十余年

江戸時代は、長岡藩より大きな藩でも改易・転封などの憂き目にあい、どの藩も決して順風満帆とはいかなかった。しかし、そのなかで長岡藩は二百五十年余りにわたって、牧野氏がおさめた稀有な藩であった。決して安寧の治世といえない時代もあったが、戦国の三河で培われた質実剛健の気風はそのまま藩風となり長岡藩は大きく発展していった。



▲毎年12月25日に大組・御小姓組の諸士は麻の上下を着用した正装で長岡城本丸御殿で藩主に拝謁（『長岡城之面影』、槇神明宮所蔵）

▲牧野忠成木像（普済寺所蔵）
牧野忠成（1581-1654）は、三河国牛久保（現愛知県豊川市）に生まれる。大坂夏の陣で戦功をあげ、大胡（前橋市）、越後長峰（上越市吉川区）を経て初代長岡藩主となり、幕末まで続く藩政の礎を築いた。

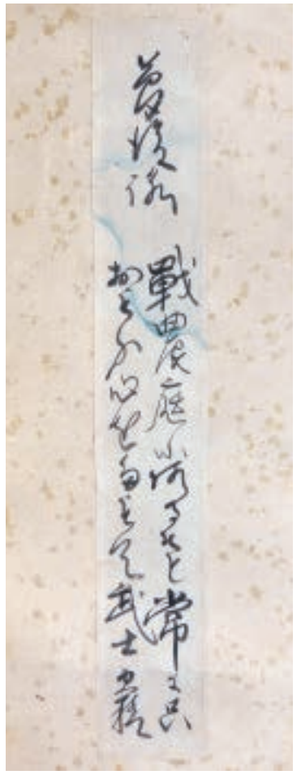
▲伝河井継之助書「常在戦場」（長岡高校記念資料館所蔵）

▲十分盃（蒼柴神社所蔵）
貞享４年（1687）、牧野忠辰は十分盃をつくって、「すべて物事を行うにはゆとりをもって行うようにせよ」と家臣・領民に節約を説いたと伝えられている。

長岡藩のプライドをつくりあげた藩主牧野家

長岡藩主牧野家は三河時代からの藩風を保つため「牛久保の壁書」に十八か条の家訓を示した。その第一条「常在戦場のこと」は武士の心意気として、戦場での辛苦を忘れず、今日の安息に感謝する気持ちで忠勤に励むことを説いている。

初代藩主忠成はのちに藩の財源となる新潟町を整備し、堀直竒から続く長岡城築城工事を完成させた。三代忠辰は中興の名君といわれ、諸士法制を制定し藩内の諸制度を整えたほか、高田藩主改易の際、高田城の受け取りの大役を果たした。九代忠精は藩校崇徳館（そうとくかん）を開校した。幕政においては忠精、十代忠雅、十一代忠恭と続いて老中を務め、不安定な時代においてその重責を担った。



▶天明七年（一七八七）牧野忠精書「夢後詠」（戦の歌）（長岡市立中央図書館所蔵）
「戦の庭にあるそ（ぞ）と常に只（ただ）　おもふ心を　たもて武士（もののふ）」
武士たるもの常在戦場の精神を瞬時も忘れてはいけないと詠んだ。

▲第10代牧野忠雅（1799-1858）

▲第11代牧野忠恭（1824-1878）

▲第12代牧野忠訓（1844-1875）

▲第13代牧野忠毅（1859-1918）

長岡藩の歴代藩主

代数	藩主名	在任期間
初代	牧野忠成（ただなり）	1618 ～ 1655
2代	牧野忠成（ただなり）	1655 ～ 1674
3代	牧野忠辰（ただとき）	1674 ～ 1721
4代	牧野忠寿（ただなが）	1721 ～ 1735
5代	牧野忠周（ただちか）	1735 ～ 1746
6代	牧野忠敬（ただたか）	1746 ～ 1748
7代	牧野忠利（ただとし）	1748 ～ 1755
8代	牧野忠寛（ただひろ）	1755 ～ 1766
9代	牧野忠精（ただきよ）	1766 ～ 1831
10代	牧野忠雅（ただまさ）	1831 ～ 1858
11代	牧野忠恭（ただゆき）	1858 ～ 1867
12代	牧野忠訓（ただくに）	1867 ～ 1868
13代	牧野忠毅（ただかつ）	1868 ～ 1870

西暦	和暦	記事
一六〇九	慶長十四	牧野忠成、牧野康成の跡を継ぎ大胡城主となる
一六一四	慶長十九	牧野忠成、大坂冬の陣に参戦
一六一五	慶長二十	牧野忠成、大坂夏の陣に参戦
一六一六	元和二	牧野忠成、越後長峰五万余石に移封、長峰城築城
一六一八	元和四	堀直竒が越後本庄（村上）へ転封 牧野忠成、初代長岡藩主となる
一六七四	延宝二	牧野忠辰、第三代長岡藩主となる
一六七七	延宝五	「長岡町中掟」と「覚」二八か条、「郷中守書」「駅場条目」を制定
一六八一	延宝九	牧野忠辰、高田藩主改易に際し、高田城受け取り
一七五三	宝暦三	山本老迂斎、「牧野家譜」を編修
一七五四	宝暦四	長岡城本丸（三蔵火事で焼失）を再築
一七六六	明和三	牧野忠精、第九代長岡藩主となる
一七七一	明和八	牧野忠辰に蒼柴大明神の神号を贈進
一八〇一	享和元	牧野忠精、老中に就任
一八三一	天保二	牧野忠雅、第十代長岡藩主となる
一八四〇	天保十一	幕府、長岡藩に川越転封（三方領知替え）を命令
一八四一	天保十二	幕府、三方領知替えを中止する
一八四三	天保十四	幕府、長岡藩に新潟町の上知を命令
一八四三	天保十四	牧野忠雅、老中に就任
一八五七	安政四	牧野忠恭、第十一代長岡藩主となる
一八六三	文久三	牧野忠恭、老中に就任
一八六六	慶応二	第二次長州征討に出兵
一八六七	慶応三	牧野忠訓が家督を相続し、第十二代長岡藩主となる
一八六八	明治元	新政府が牧野鋭橘（忠毅）の相続を許し、長岡藩の再興を許可

火焔土器・八幡林遺跡・長尾景虎…
長岡の個性が生まれる

長岡の地に人類が姿をみせる遥か一万六千年以前の旧石器時代。約五千年前の縄文時代には個性豊かな火焔土器の文化が華開いた。長岡の古代・中世。信濃川、日本海の港寺泊などでさまざまな品物が行き来し、人びとの交流がさかんとなった。青年時代の上杉謙信は長岡で育ちやがて戦国の雄となる。直江兼続はその意志を継ぐ。

太古から続く長岡人の営み

氷河期のまだ寒冷な気候が続いた旧石器時代終末、信濃川・魚野川の合流地点にあたる荒屋遺跡には、サケなどの獲物を求めて、旧石器人たちが頻繁に訪れていた。

やがて気候が温暖化して縄文時代に入り、馬高・三十稲場遺跡にみられるように竪穴住居をつくって安定した大規模なムラを営むようになる。

その後、弥生・古墳時代を経て、奈良・平安時代に移り変わると、海岸部の八幡林遺跡に拠点となる官衙（かんが）（役所）が設置されるなど、古志郡から三島郡にわたる長岡の輪郭が形づくられた。

鎌倉・南北朝・室町（戦国）時代と時は移り、上杉謙信（長尾景虎）が登場する。謙信のもとで結束した長岡のサムライたちは、寡黙で信義に厚く、戦国最強と賞賛され、長岡人の名声を天下にとどろかせた。

▲荒屋型彫器（新潟県立歴史博物館所蔵）
川口地域の荒屋遺跡（国史跡）から出土した旧石器時代の細石刃文化の石器。

▲火焔土器（国指定重要文化財、長岡市馬高縄文館所蔵、撮影：小川忠博）
昭和11年（1936）の大晦日、長岡市関原町の馬高遺跡（国史跡）で発見、命名されたと伝える。4つの大ぶりな突起（鶏頭冠）からその名がつけられた。類似の土器は「火焔型土器」と呼ばれ、信濃川流域を中心に分布する。

▲八幡林遺跡から出土した木簡と墨書土器（新潟県指定文化財、長岡市教育委員会所蔵）
和島地域にある八幡林遺跡は古志郡の役所跡（官衙）で、多数の木簡が出土した。「沼垂城」とかかれた木簡（写真左上）は、『日本書紀』に記された「渟足柵」（柵は蝦夷に対する防御拠点）が実在することを証明し、古代史上の大きな発見となった。

▲寺泊沖から揚陸された貝殻付珠洲焼の壺（個人所蔵）
上杉謙信や直江兼続が活躍した時代、中国産の陶磁器類や能登半島でつくられた珠洲焼などが日本海を経由してさかんに運ばれ、長岡市域の遺跡でも広く発見されている。寺泊などの海の玄関口、信濃川沿いの津などを通じて地域の個性的な文化が強く結びついていた。

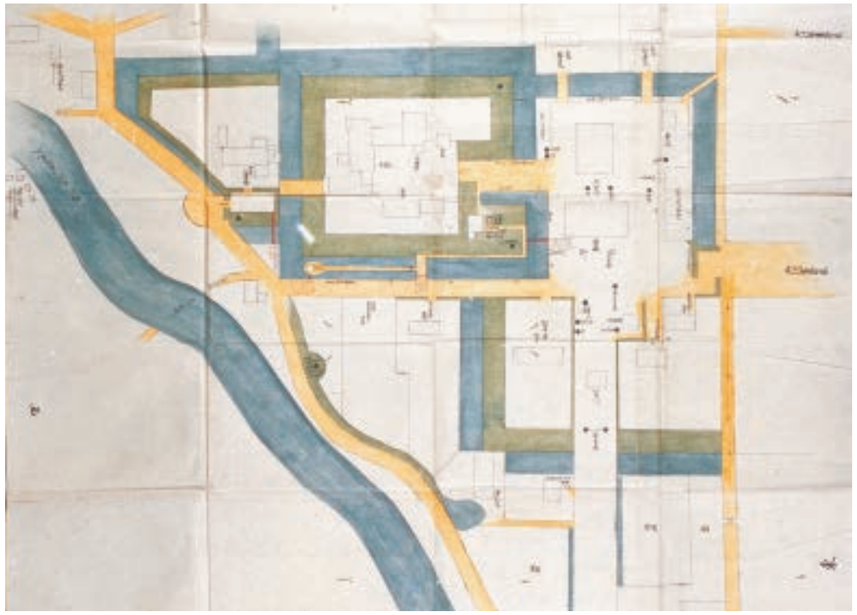
▲直江兼続像（高野山龍光院、瑜祇塔壁画、小谷津任牛謹写、個人所蔵）
直江兼続（1560-1619）は魚沼地域の出身。与板城主直江氏を継ぎ、上杉謙信の後継者・上杉景勝の飛躍を支えた。兼続が大きな信頼を寄せた与板衆は、多彩な才能を発揮し、上杉景勝の会津移封、越後一揆、米沢転封などの激動に耐え、米沢藩の成立に寄与した。

◀一魁斎芳年画「上杉輝虎入道謙信」（明治元年作、長岡市立中央図書館所蔵）
上杉謙信（1530-1578）は、長尾景虎と称した青年期に栃尾地域で育ち、やがて上越春日山城を拠点として関東・北陸地方に勢力を伸ばし、戦国大名として飛躍した。謙信に従って各地を転戦した長岡のサムライたちが最も輝いた時代である。

西暦	和暦	記事
一六〇〇〇年前		細石刃文化拡大（荒屋遺跡）
五〇〇〇年前		火焔土器誕生（馬高遺跡・岩野原遺跡）
三〇〇〇年前		東北地方から亀ヶ岡文化伝播（藤橋遺跡・朝日遺跡）
紀元前三世紀ころ		米づくり伝播（尾立遺跡）
三世紀ころ		環濠集落が盛行（横山遺跡）
四世紀ころ～		古墳の造営（大久保古墳群・下小島谷古墳群・麻生田古墳群・大萱場古墳）
六四七・六四八	大化三・大化四	渟足柵・磐舟柵設置
六八九～六九二	持統三～持統六	越国が越前・越中・越後に三分割
七世紀末ころ		横滝山廃寺がこのころ造営
七〇二	大宝二	頸城・魚沼・古志・蒲原の四郡が越中国から越後国に編入
七一七～七二四	養老元～養老八	「沼垂城」と書かれた木簡が廃棄（八幡林遺跡）
八六三	貞観五	越中・越後国に大地震発生
九二七	延長五	『延喜式』に式内社古志郡六座（三宅神社二座・桐原石部神社・都野神社・小丹生神社・宇奈具志神社）が記載
九六七	康保四	『延喜式』に郡名「古志」・「蒲原」確認
一一〇〇～一二〇〇	康和二～正治二	古志郡に大島荘・紙屋荘・志度野岐荘・白鳥荘・吉河荘・太田保・高波保などの荘園・国衙領を確認
一二七一	文永八	鎌倉幕府を批判した罪で日蓮が寺泊を経て佐渡に配流
一三〇七	徳治二	妙法寺の日昭が置文制定
一三五五	正平十・文和四	南北朝の両軍が蔵王堂や於木野島（滝谷町）、平方原（長岡駅前一帯）などで激戦
一四三四	永享六	世阿弥元清が寺泊を経て佐渡に配流
一五四八	天文十七	上杉謙信（長尾景虎）、栃尾城から春日山城に移動
一五六〇～一五七七ころ	永禄三～天正五ころ	上杉謙信（上杉政虎・輝虎）のもとで栃尾の本庄氏、与板の直江氏、刈羽の斎藤氏、長岡の長尾氏・河田氏らが活躍
一五七八	天正六	上杉謙信の急死により上杉景勝と上杉景虎が後継者の座を争闘（御館の乱）
一五八〇～一五九七ころ	天正八～慶長二ころ	上杉景勝・直江兼続らが国づくりを推進

堀氏から牧野氏へ
長岡開府の前夜

上杉景勝の会津移封後、越後国では小藩が分立した。長岡は堀氏の一族が治め、堀直竒（なおより）によって長岡城の建設とまちづくりが進められた。堀直竒と交代して長岡に入った牧野氏は、現在の愛知県豊川市の出身で、徳川家康・秀忠の信任厚い譜代大名として、群馬県前橋市大胡（おおご）、上越市吉川区長峰と拠点を移し、着実に実力を蓄えていた。



▲「御宮御境内并役所向絵図」（安禅寺所蔵）
蔵王堂城が堀氏によって築かれた。中世以来、蔵王堂は、信濃川舟運の拠点として物資が集積し、また、蔵王権現を信奉する人びとが集う聖地であり、長岡地域を支配する絶好の適地だった。現在も堀と土塁の一部が残る。長岡のまちづくりの始まりの姿を偲ばせる。

▲堀直竒木像（昌福寺所蔵）
堀直竒（1577-1639）が長岡のまちづくりの基礎を築いた。「長岡」や「表町」などの地名は直竒の時代にあらわれる。直竒は、長岡と新潟を結ぶ信濃川の舟運を整備し、流通経済の振興、情報の拡散など、長岡の魅力を伝える素地を創り、牧野氏はその要諦を継いだ。

▲『温古之栞』８篇「古城跡の部」（長岡市立中央図書館所蔵）
上杉氏の会津移封により、長岡は新しい時代を迎える。しかし、時代の変換は今と変わらず劇的だった。長岡地域に伝えられたその記憶を掘り起こした、越路地域出身の大平与文次がいる。牧野氏時代の長岡以前の歴史が、大切に守り伝えられてきたのである。

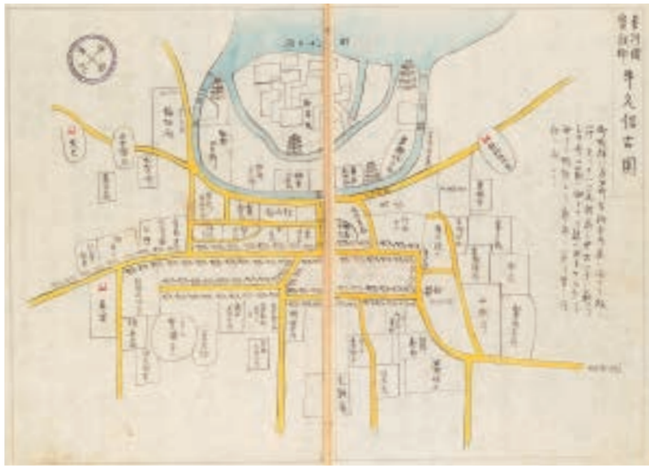
長岡の近世史が始まる

新潟県の歴史は、上杉景勝の会津移封を中世と近世の境とする。領民や商人、寺社等の移動に伴い、農村や都市部の風景が激変する。耕作者のいない耕地が増えた。

堀氏はさっそく近世風の検知（検地）の実施や、信濃川を介した流通網の整備等、領内の経済基盤の整備に取り組んだが、上杉氏時代の作法との相違を近づけることに苦慮し、やがて関ヶ原の戦いの越後版ともいえる越後一揆が発生する。戦火に焼かれた村々に再び領民を呼び戻すことや、荒廃した耕地の耕作などが喫緊（きっきん）の課題となった。さらに大坂の陣の軍事動員に関わる人員、銭貨や糧食などの負担も重荷となった。

堀直竒による長岡の城下町整備は、まちづくりに関わる雇用促進や、集った人びとの欲求を満たす産業の育成を促し、長岡に活気をもたらした。

▲牧野康成像（「徳川十七将ノ図」部分、牧野家旧蔵、長岡市立中央図書館所蔵）
牧野康成（1555-1609）は、初代長岡藩主牧野忠成の父である。三河国牛久保城主から、徳川家康に従い、上野国大胡城（現前橋市大胡）の城主となり、譜代大名牧野家の礎を築いた。名前の「康」は、家康から拝領したものと伝えられ、家康の厚い信頼がうかがえる。市指定文化財



▲「参河国宝飯郡牛久保古図」（『懐旧雑誌』、長岡市立中央図書館文書資料室所蔵）
初代長岡藩主牧野忠成（1581-1654）が生まれたころ、牧野氏は、三河国牛久保城（現愛知県豊川市）を本拠としていた。長岡藩筆頭家老稲垣氏や次席家老山本氏など、長岡藩士の多くのルーツも牛久保にある。現在も豊川市では、牧野氏の威徳を大切に伝えている。

▲大胡城跡（前橋市大胡、群馬県指定文化財）
初代長岡藩主牧野忠成と父康成の居城。三河国牛久保からこの地に移った牧野氏は、天正18年（1590）から元和２年（1616）まで２万石の領地を治めた。大胡城跡の西方、名峰赤城山を北に臨む古刹養林寺に忠成の父・康成の墓所があり、牧野氏の威徳を伝える。

▲長峰城跡（上越市吉川区長峰）
上野国大胡城主牧野忠成が元和２年（1616）に封ぜられた５万石余の居城。忠成は城の完成を待たずに元和４年(1618)に長岡城へと移るが、現在も壮大な土塁と空堀が残る。忠成の子で、後に与板藩祖となる牧野康成（1617-1657）はここで生まれたと伝える。

西暦	和暦	記事
一五九八	慶長三	上杉景勝、会津に移封
		上杉景勝にかわり堀秀治が春日山城主となり、蔵王堂城には一族の堀親良が入城
一六〇〇	慶長五	関ヶ原の戦い勃発
		会津の上杉景勝・直江兼続らが越後の堀秀治軍を攻めるが敗退（越後一揆）
一六〇二	慶長七	堀親良、兄秀治の子供鶴千代に家督継承を指示
一六〇四	慶長九	このころ、堀鶴千代の後見として、堀直竒は蔵王堂に在番と伝承
		堀直竒が長岡城とまちづくりを推進
一六〇五～	慶長十～	このころ、「長岡」という地名を初めて確認
一六〇六	慶長十一	このころ、堀鶴千代没、蔵王堂三万石は坂戸城主堀直竒に編入と伝承
		堀直竒、信濃飯山に移封
一六一〇	慶長十五	松平忠輝、信濃松代から越後福島に移封され、長岡城には忠輝の重臣山田勝重が在番
一六一四	慶長十九	大坂の陣、堀直竒参戦
一六一五	慶長二十	
一六一五～	元和年間	長岡船道の船数が一〇八艘に設定
一六二三		
		高田藩主松平忠輝改易
		堀直竒、信濃飯山五万石から越後長岡八万石へ移封され、長岡のまちづくりを推進
一六一六	元和二	牧野忠成、堀直竒とともに松平忠輝の高田城二ノ丸受け取りを担当、長岡城は諏訪頼永が警衛
		堀直竒、長岡・新潟の陸路・海路・河川交通網の整備を推進
一六一七	元和三	堀直竒、長岡城と城下町の整備をさらに推進

市民協働の萌芽
長岡城の完成

元和四年（一六一八）に初代長岡藩主となった牧野忠成は、堀氏時代に始まった長岡城の建設を引き継ぎ完成させる。長岡城は、信濃川の中州にあることや城の縄張りから「苧引型兜城（おびきがたかぶとじょう）」、「八文字構浮島城（はちもんじかまうきしまじょう）」とも呼ばれた。長岡のまちづくりの礎は、長岡城の立地と形状にルーツを見つけることができる。

かつて存在した長岡城

大坂夏の陣の終結により、長く続いた戦乱の世が終わりを告げた。このころ、長岡城は築城される。長岡城跡は、規模三万七千坪余とも三万九千坪ともいわれる。現在の長岡市の中心市街地が入るほどの広大な城がかつて存在した。

長岡城は、河川を利用して自然の外郭を形成し、水を引いて幾重にも堀を巡らせた。中心部に本丸（現在の長岡駅付近）と二の丸（現在のアオーレ長岡付近）、詰の丸があった。天守閣はなく、北西の三階隅櫓（さんかいすみやぐら）がその役割をしていた。

城門は本丸に通じる大手門、表町に通じる町口門、三国街道に接する千手口門、新潟に通じる神田口門など、十七門があった。旧暦六月十五日に行われる蔵王大祭、年貢納入の時期に行われる御能の時には、侍や、農民・商人などの庶民が長岡城内に集まった。

身分の垣根を超えたこの風景に「市民協働」の源流を感じることができる。

▲飯島文常画「蔵王大祭屋台行列図」（蒼柴神社所蔵）
蔵王大祭の祭日は、誰もが城内に入ることができた。身分を越えた「士民協働」の風景がある。現在、付近には「市民協働」のシンボル、シティホールプラザ「アオーレ長岡」が建っている。

◀「越後国古志郡之内長岡城之図」（国立公文書館内閣文庫所蔵）
正保年間の長岡城と城下町を描いた絵図。侍屋敷、足軽町、町屋などに区割りされ、周辺には深田、芝原などが広がる。初期の長岡城のすがたが記録されている。

▲小川当知画「蔵王社御境内の図」（『長岡城之面影』、槇神明宮所蔵）
「蔵王さま」として崇敬される金峯神社は、総鎮守として古くから信仰された。正徳５年（1715）、蔵王堂城跡内にあった社殿は、現在の金峯神社の地に移築された。

◀小川当知画「御入国御着城の図」（『長岡城之面影』、槇神明宮所蔵）
長岡城と表町の町屋に接する城の櫓門。現在、「ながおか町口御門」が整備され、福祉の拠点となっている。

▲長岡城に入る屋台

◀小川当知画「正月陣羽織着用の退城」（『長岡城之面影』、槇神明宮所蔵）
長岡城には、17の城門があった。本丸へ通じる大手御門から退城する侍の姿が描かれている。

西暦	和暦	記事
一六一八	元和四	牧野忠成、初代長岡藩主となる
一六二〇	元和六	牧野忠成、栃尾郷一万石加増（知行高七万二千石余）
一六二五	寛永二	牧野忠成、二千石余開発（知行高七万四千石）
一六二五	寛永二	蔵王権現社別当安禅寺、上野寛永寺末寺となる
一六三四	寛永十一	牧野忠成、与板一万石・三根山六千石を分与
一六四二	寛永十九	長岡船道、幕府の認可取得
一六四七	正保四	「越後国絵図」作成
一六五〇	慶安三	長岡藩、家中軍制制定
一六五一	慶安四	このころ、福島江完成
一六七四	延宝二	牧野忠辰、第三代長岡藩主となる
一六七四	延宝二	「諸士法制」制定
一六八一	延宝九	牧野忠辰、高田藩主改易に際し、高田城受け取り
一六八九	元禄二	長岡藩、草間・保高・小林家を町年寄に任命
一六九四	元禄七	牧野忠辰、弥彦神社に五所宮建立

雨龍の殿様の登場
今につながる文化・教育・産業

「雨龍の殿様」牧野忠精の時代、長岡藩は新たな展開が生まれる。忠精は、蒼柴神社を造営し、藩校崇徳館を開校するなど、教育・文化の振興に尽力した。特に崇徳館は、数多の逸材を世に送り出す。栃尾地域では、織物業が発展し代表的な産業として確立。忠精の残した多くの事績は、次の時代に受け継がれていく。

「雨龍の殿様」忠精が残した事績

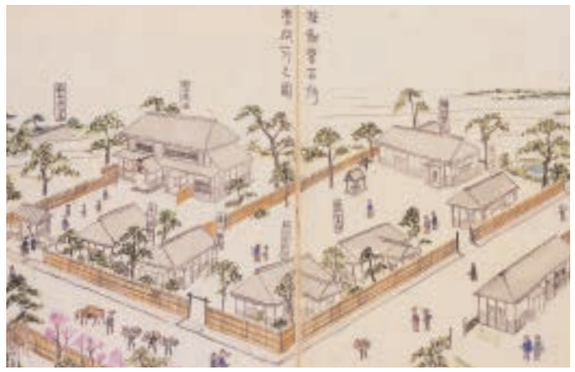
第九代長岡藩主牧野忠精は、歴代藩主のなかで初めて老中に就任し、幕政の中枢を担った。雨龍の絵を得意として、将軍徳川家斉にも献上したほか、長岡に茶道宗偏流を広めた。

教育政策では、藩校崇徳館を開校。後に藩政を担う河井継之助はじめ、多くの人材を輩出した。加えて、蒼柴神社を悠久山に建立するなど、忠精の事績は以後の長岡藩政に多大な影響を与えた。

▲牧野忠精画「雨龍（登り龍）」（長岡市立中央図書館所蔵）

▲蒼柴神社拝殿（長岡市悠久町）
第３代長岡藩主牧野忠辰を祀るために、牧野忠精により造営された。国登録有形文化財。

▲秋山景山書（長岡市立中央図書館所蔵）
秋山は長岡藩儒。崇徳館開校から教授・都講を長くつとめた。



▶小川当知画「槍剣稽古所・学問所の図」（『長岡城之面影』、槇神明宮所蔵）
牧野忠精は藩校崇徳館を開校。幕府は朱子学以外の学問を禁じたが、実践に活用できる学問を導入。河井継之助、村松忠治右衛門など、藩政を担う人材を数多く輩出した。

◀孔雀尾具足陣羽織（長岡市与板歴史民俗資料館所蔵）
宝永３年（1706）、与板地域を中心として井伊与板藩が成立。徳川四天王の一人、井伊直政嫡男の系譜を継ぐ家柄。この陣羽織は、直政が徳川家康から拝領したもので、家宝として伝えられた。市指定文化財。

▲御本陣入口の遺構（長岡市東川口）
三国街道の宿場である川口宿では、中林家に本陣が置かれた。牧野家はじめ越後の諸大名のほか、新潟奉行・佐渡奉行なども利用した。今も残る防御施設「枡形」の石垣が、かつての威容を伝えている。市指定文化財。

▲中林家の輪島朱塗膳椀（市指定文化財、個人所蔵、長岡市川口歴史民俗資料館に展示）

▲貴渡神社社殿（長岡市栃堀）
栃堀村庄屋植村角左衛門貴渡を機神様として祀った神社。角左衛門は、天明３年（1783）の大飢饉に際し、飢民救済に奔走した。この経験から、殖産興業の必要性を意識し、栃尾織物の品質改良・商品化に取り組んだ。大崎オヨのもとに妻を派遣し技術を修得させ、その技術を村民に伝えるなど、栃尾織物の中興の祖となった。

栃尾織物を変えた縞紬

宝暦期頃から栃尾紬の商品価値が高まってきた。そして、縞紬の創始により栃尾紬は飛躍するが、その時期には諸説ある。大崎オヨは、越後上布の縞織りを参考に研究を続けた結果、縞織物を完成させた。植村角左衛門は、この縞織物を商品化することに成功した。この後、栃尾紬の生産量は爆発的な伸びをみせ、栃尾の主要産業の地位を確立した。縞紬は、オヨ・角左衛門の努力により完成をみた。

▲蚊帳（個人所蔵）
麻で織られたもので、大崎オヨ自作の蚊帳といわれている。市指定文化財。

西暦	和暦	記事
一七〇二	元禄十五	与板藩主牧野康重、小諸へ移封
一七〇六	宝永三	井伊直矩、初代井伊与板藩主となる
一七一一	正徳元	長岡藩の町年寄を検断と改称、町方三役制始まる
一七一五	正徳五	蔵王権現社、現金峯神社の地に移築
一七一八	享保三	長岡藩、表一ノ町に町会所開設
一七二〇	享保五	長岡藩、大庄屋を割元と改称
一七二二	享保七	猿橋・妙見など七ヶ所に津留番所設置
一七二八	享保十三	長岡町大火（三蔵火事）発生
一七三一	享保十六	左近の土手が大雨で決壊、長岡城内に浸水
一七三三	享保十八	牧野忠辰に蒼柴明神の神号を贈進
一七四三	寛保三	栃尾町の秋葉権現、遠江国の秋葉三尺坊と本末争い
一七五三	宝暦三	山本老迂斎、「牧野家譜」を編修
一七五四	宝暦四	長岡城本丸（三蔵火事で焼失）を再築
一七五五	宝暦五	山本老迂斎、家塾「書堂」開塾
一七五八	宝暦八	表四ノ町に町会所新築
一七六〇	宝暦十	高野余慶、「由旧録」を著す
一七六六	明和三	牧野忠精、第九代長岡藩主となる
一七七一	明和八	牧野忠辰に蒼柴大明神の神号を贈進
一七八一	天明元	左近の土手が大雨で決壊、長岡城下に浸水
一七八一	天明元	悠久山に蒼柴大明神（牧野忠辰神号）社殿建立
一七八九	寛政元	洪水で長岡城内に浸水
一七九〇	寛政二	このころ、栃尾織物発展の礎となる栃尾縞紬創始
一七九六	寛政八	高野余慶、「昇平夜話」を著す

激動の長岡を力強く生きる
自然との共生

幕末の長岡藩は激動の時代を迎える。三方領知替え、新潟湊の上知（領地の返上）、文政の大地震。難局に直面した長岡藩のかじ取りは、次第に崇徳館の出身者に引き継がれていく。一方、庶民の暮らしの記憶は、この時代に多く描かれた。雪降ろし、農作業の風景など。私たちの暮らしと変わらない風景がそこにある。

▲飯島文常画「雪之図」（市指定文化財、長永寺所蔵）

自然とともに生きる庶民の暮らし

この時期、長岡藩絵師飯島文常、片山翠谷によって、庶民の生活を描いた風俗画が数多く描かれた。文常の「雪之図」には、厳しい雪国のなかで、むしろそれを楽しんでいるかのような明るいタッチで庶民の姿が描かれている。また、翠谷の「農耕図」には米どころ新潟のルーツとなる農民の姿が描かれている。

▲小川当知画「信濃川の鵜縄」（『長岡城之面影』、槇神明宮所蔵）

田起し

田植え

俵詰め

▲片山翠谷画「農耕図」（長岡市立中央図書館文書資料室所蔵）

勇躍する藩士たち

第九代長岡藩主牧野忠精が開校した藩校崇徳館は、藩政を担う藩士を多く輩出した。藩財政を立て直した村松忠治右衛門、北越戊辰戦争で指揮を執った河井継之助、そして、継之助とともに藩政をリードした花輪求馬、三間市之進。鵜殿団次郎は、幕府の洋学研究機関である蕃書調所（後の東京大学につながる）教授となった。忠精の蒔いた種は、長岡藩にとどまらず、江戸においても花開いた。

▲文政６年（1823）「新潟町絵図」（新潟市歴史博物館所蔵）
長岡藩領の新潟は財政面で重要な港町だった。天保 14 年（1843）６月、幕府は新潟の上知を命じて幕府領とした。これ以後、長岡藩の財政は極度に悪化した。

◀水島爾保布画「盂蘭盆御家中踊」（「昔の長岡十二ヶ月」、長岡市立中央図書館所蔵）
盂蘭盆会の盆踊りは旧暦７月 13 日から 16 日まで行われた。盆踊りが好きな河井継之助は、近郷へと踊りに出かけていったという。

▲鵜殿団次郎（1831-1868）
長岡藩の洋数学者。蕃書調所教授や幕府目付役を勤める。勝海舟と交友があった。明治元年（1868）12 月、38 歳の若さで死去した。

▲村松忠治右衛門（1818 - 不詳）
河井継之助の推挙で勘定頭に就任。豪商の抜擢、藩士の倹約の徹底などを断行し、藩財政を立て直した。

西暦	和暦	記事
一八〇一	享和元	第九代長岡藩主牧野忠精、老中に就任
一八〇四	文化元	木喰上人、白鳥村の宝生寺で観音像を完成
一八〇八	文化五	長岡藩校崇徳館開校
一八〇九	文化六	千手町村の大和屋、長岡藩の菓子御用達となる
一八一五	文化十二	秋山景山、崇徳館都講に就任
一八一七	文政十	貞心尼、福島村の閻魔堂に移住
一八二八	文政十一	文政の大地震発生
一八三〇	天保元	栃尾で炭一揆発生
一八三二	天保三	長岡藩医新川順庵・小山良岱、解剖を行う
一八三五	天保六	貞心尼、「蓮の露」を完成
一八三六	天保七	高野松陰、崇徳館都講に就任
一八三六	天保七	新潟町で密貿易発覚
一八四〇	天保十一	幕府、長岡藩に川越転封（三方領知替え）を命令
一八四一	天保十二	三方領知替え中止となる
一八四三	天保十四	幕府、長岡藩に新潟町の上知を命令
一八四三	天保十四	第十代長岡藩主牧野忠雅、老中に就任
一八四四	弘化元	長岡町大火（俊治火事）、城下町がほぼ焼失
一八五三	嘉永六	栃尾で打ちこわし発生
一八五四	安政元	小林虎三郎に蟄居を命令
一八五九	安政六	蟄居中の小林虎三郎、「興学私議」を著す
一八六三	文久三	第十一代長岡藩主牧野忠恭、老中に就任
一八六四	元治元	表一ノ町の紅屋、長岡藩の菓子御用達となる
一八六七	慶応三	河井継之助、長岡藩家老に就任
一八六七	慶応三	河井継之助、新政府へ建言書を提出
一八六七	慶応三	長岡藩、長岡船道を廃止
一八六八	慶応四	北越戊辰戦争

ムラを支えるリーダーの胎動
義民の面影を各地域にみる

江戸時代の長岡市域は、長岡藩はじめ複数の中小藩領・幕府領が点在していた。そのため、領主が頻繁に交代し、「小藩分立（しょうはんぶんりつ）」の状況が続いた。このような状況下では、村役人や豪商はじめとする地域運営を担うリーダーの存在が不可欠であった。リーダーの経験と誇りは、近代になって、まちづくりの担い手である名望家（めいぼうか）の系譜に伝えられていく。

命を懸ける義民の勇気

各地域には多くの義民伝説が存在する。小国地域の武石村庄屋難波小右衛門（高田藩領）、中之島地域の名主大竹与茂七（新発田藩領）、越路地域の浦村組頭岡村権左衛門（長岡藩領）など。領主権力に屈せず、村を守るべく命を懸ける姿は、村民を救っただけでなく、時代を超えて私たちに勇気を与えてくれる。現在でも、各地域で地元の誇りとして顕彰されている。

▲与茂七地蔵（長岡市中之島）
与茂七は、大竹家の分家で新発田藩中之島組の名主。宝永年間の洪水の際、与茂七の指揮で藩有林を伐採し防水工事に使うなど、被害を最小限に防いだ。しかし、この洪水に端を発した争いにより、与茂七ほか４名が処刑された。市指定文化財。中之島義民与茂七顕彰会所有。

▲伝権左衛門の像（朝日寺所蔵）
寛政元年（1789）、幕府領から長岡藩領となった来迎寺・浦村など８か村は、減税の嘆願を繰り返し成果を得た。しかし、嘆願を主導した浦村組頭の岡村権左衛門は、強訴徒党を企てたとして打首獄門とされた。村を救うため奔走した権左衛門は、義民として顕彰されている。

▲義民小右衛門碑（長岡市小国町武石）
寛文７年（1667）、武石村は大飢饉に見舞われた。武石村庄屋難波小右衛門は、高田藩に御蔵米の払い下げを願ったが聞き入れられず、無断で御蔵米を窮民に分け与えた。この罪で斬首となった。

▲正保４年（1647）の越後の領分概念図（新潟県立歴史博物館編『平成23年度夏季企画展「越後の大名」』を転載）

▲旧長谷川家住宅（長岡市塚野山）
塚野山庄屋長谷川家は、幕府領、上山藩領など領主が変わるなか、周辺村々の責任者として指導力を発揮した。住宅の主屋は、享保元年（1716）再建とされる県内に現存する最古の住宅建築。国指定重要文化財。

現在も残る名家の名残り

越路地域の長谷川家は塚野山村庄屋を代々つとめた。上山藩領時代には、大庄屋格・郡中総代として手腕を発揮した。幕末の当主長谷川市郎左衛門久静は、周辺村々と利害調整を行い、荒瀬の瀬替え・新田開発を推進した。住宅は現在も残っており、長岡市の建築物では唯一の国重要文化財に指定されている。

与板地域の大坂屋三輪家は、十七世紀中頃移住してきたといわれる。江戸時代には越後屈指の豪商として栄え、近隣諸藩の財政をよく支えた。後に三輪家が別荘として建築した「楽山亭」は、市民から〝べっそう〟と呼ばれ、今も親しまれている。

▲大坂屋看板（長岡市与板歴史民俗資料館所蔵）
大坂屋は、与板三輪家の屋号。三輪家は酒造業を営み、与板最大の醸造量を誇った。与板藩はじめ様々な藩へ多額の御用金を上納した。市指定文化財。

西暦	和暦	記事
一六四二	寛永十九	寺泊大火発生
一六五七	明暦三	与板藩主牧野康成、与板村に陣屋設置
一六五九	万治二	このころ大坂屋三輪家、与板へ移住
一六六七	寛文七	武石村庄屋難波小右衛門、蔵米を窮民に分与した罪で斬首
一六七七	延宝五	妙法寺本堂前に黒門建立
一六八一	延宝九	高田藩主松平光長改易
一六八二	天和二	妙法寺参道に赤門建立
一六八五	貞享二	川口組大絵図作成
一六八八	貞享五	幕府、塚野山に代官所出張陣屋設置
一六八九	元禄二	俳人松尾芭蕉、寺泊通過
一六九一	元禄四	鞍掛神社再建
一六九八	元禄十一	川口村船会所、「定」を取り決める
一七〇二	元禄十五	与板藩主牧野康重、小諸へ移封
一七〇三	元禄十六	中之島の諏訪神社、雪で倒壊した社殿再建
一七〇四	宝永元	刈谷田川・猿橋川洪水
一七〇六	宝永三	塚野山村大火、長谷川邸焼失
一七一〇	宝永七	幕府巡検使、寺泊来町（住吉屋ほか二軒、本陣に）
一七一三	正徳三	与茂七騒動
一七一六	享保元	長谷川邸再建
一七一七	享保二	住雲園築庭
一七三六	元文元	淀藩、脇野町陣屋設置
一七五六	宝暦六	丸山元純、「越後名寄」を著す
一七七一	明和八	白山媛神社神殿・拝殿建立
一七八六	天明六	幕府、脇野町代官所設置
一七九二	寛政四	岡村権左衛門騒動

地域の宝のルーツ
北前船・牛の角突き・良寛

江戸時代後半、各地域では、今につながる「地域の宝」が多く生まれた。これらは、庶民の「旅」や「交流」から生まれた。宗教、商い、文化、技術の習得など、その目的は様々であった。当時の庶民の積極的な活動は、私たちの想像をはるかに超えており、多くの「地域の宝」を生み出した。

旅と交流が生んだ「地域の宝」

この時期になると旅が気軽にできるようになった。長岡を訪れた旅人は様々な足跡を残した。全国各地を渡り歩いた木喰上人は市内各地で木喰仏を造った。和島地域の島崎を終焉の地とした良寛は、多くの詩歌を残した。日本海を往来する北前船の船主たちは、寺泊地域の寺社に船絵馬を奉納した。一方で、三島地域出身の中屋庄兵衛のように、長岡を出て外で学んだ技術を地元に伝えるような例もあった。

また、文化交流を通して当時の長岡の様子が意外な形で記録されることもあった。山古志地域の伝統習俗である牛の角突きが、曲亭馬琴著『南総里見八犬伝』に紹介された。当時の旅や交流の所産が、様々な地域資源として今に伝わっている。

▲木喰上人作の仁王尊（真福寺所蔵）
文化元年（1804）に87才の時に約2か月間、木喰上人は太郎丸（小国地域）の真福寺に滞在。一本のケヤキから二躯制作したと伝えられる。市指定文化財。

▲中屋庄兵衛碑（長岡市脇野町）
脇野町鋸の元祖中屋庄兵衛は、天保7年（1836）、会津若松に赴き、鋸の鍛工法を修得。天保13年、脇野町で開業した。その後、技術は弟子に受け継がれ、三島地域の地場産業に成長した。

▲諏訪神社の算額（諏訪神社所蔵）
嘉永2年（1849）、上岩井村（三島地域）出身の和算学者・安立数衛の弟子の吉原乗義が奉納した算額。図形に関する問題とその解法が記されている。市指定文化財。三島郷土資料館に展示。

▲牛の角突きを描いた『南総里見八犬伝』の挿絵（長岡市立科学博物館所蔵）
曲亭（滝沢）馬琴は、鈴木牧之の取材に基づいて、二十村郷（現在の山古志地域など）で行われていた牛の角突きを著作に取り入れた。牛の角突きが江戸時代までさかのぼることを示している。市指定文化財。

▲白山媛神社奉納船絵馬（白山媛神社所蔵）
北前船が活躍していた頃、船絵馬は海上の安全祈願として奉納された。白山媛神社には安永3年（1774）から明治22年（1889）までの船絵馬50種52枚が奉納されている。国指定重要文化財。

▶良寛（燕市分水良寛史料館所蔵）
島崎で晩年を過ごした良寛。能登屋木村元右衛門家敷地内の庵室で暮らし、貞心尼と交流した。良寛の墓は隆泉寺に隣接する木村家墓地にあり、毎年6月6日には墓前法要が行われる。

▲良寛遺墨（㈲最香堂所蔵）
屏風の七言詩「袖裏毬子直千金」は、自分より上手なまりつきはいない、その極意は「一つ二つ三つ」とただ無心に数えてつくことだ、と詠んでいる。子供たちとまりつきに興じつつ、仏の教えの無限さを説く、良寛のすがたが偲ばれる。市指定文化財。良寛の里美術館に展示。

西暦	和暦	記事
一八〇二	享和二	良寛、密蔵院に仮住
一八〇四	文化元	与板藩主井伊直朗、城主格となる
一八〇四	文化元	木喰上人、真福寺に滞在し仁王尊など制作
一八一五	文化十二	久須美逸翁、私塾暘谷館開校
一八一八	文政元	上山藩、七日市陣屋設置
一八二三	文政六	与板城完成
一八三一	天保二	良寛、島崎村の木村家で病没
一八四二	天保十三	脇野町鋸の元祖中屋庄兵衛開業
一八四五	弘化二	三輪長誠、「与板城下絵図」を著す
一八六〇	万延元	漢学者遠藤軍平、入軽井に西軽塾開校
一八六〇	万延元	与板藩校正徳館開校
一八六一	文久元	中之島組大庄屋大竹英治、郷校済美堂開校
一八六二	文久二	西野新田名主入澤恭平、医院開業
一八六四	元治元	石川雲蝶作欄間十四面、林興庵に寄進
一八六四	元治元	「産物見立取組」（越後土産）に小国紙が掲載
一八六五	慶応元	上山藩、七日市に明新館支館開校
一八六八	慶応四	北越戊辰戦争

北越戊辰戦争
激しい戦火と灰燼に帰した長岡

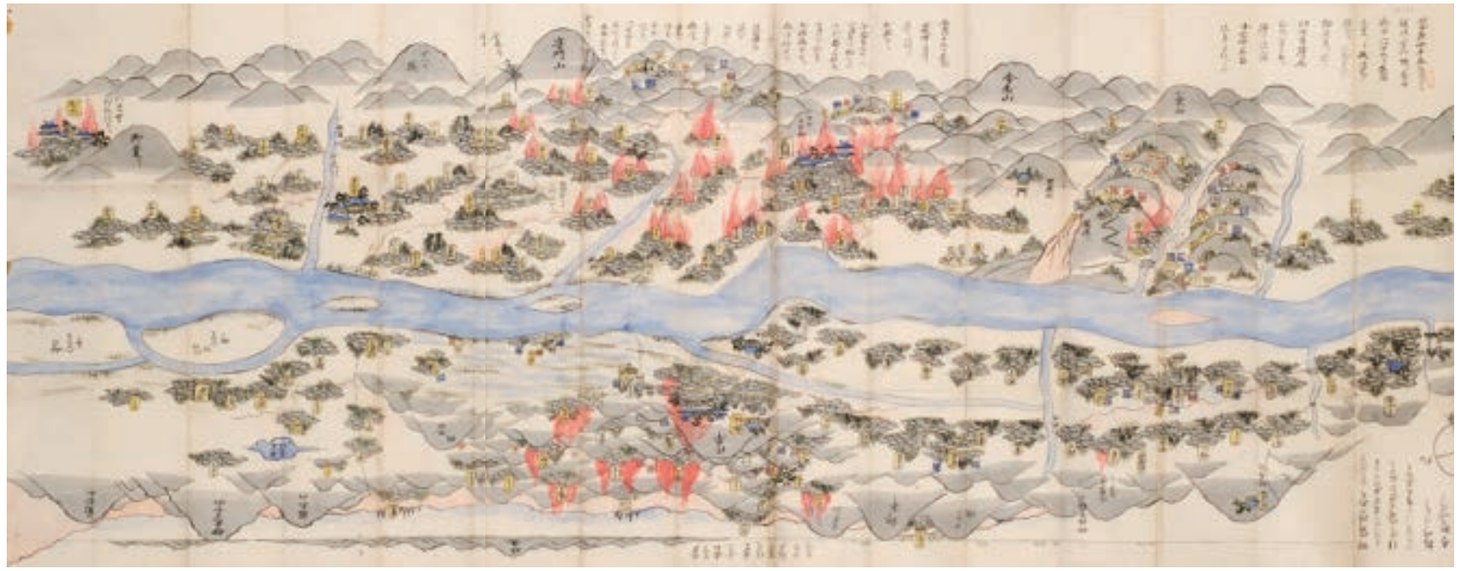
鳥羽・伏見の戦いに始まった戊辰戦争は、東北を中心とした動乱へとその姿を変えていった。北越戊辰戦争において長岡藩は当初武装中立を主張していたが、開戦か恭順かで藩を二分しながら、奥羽越列藩同盟に加盟、戦争へと向かっていく。激戦の地であった長岡では奥羽越列藩同盟の協力を得て千四百の軍勢で新政府軍二万に対し歴史に残る攻防戦を始める。

長岡藩の激戦

慶応四年（一八六八）、新政府軍は各藩から恭順の請書を提出させ、各藩はそれぞれ二月までにほぼ態度を明らかにした。しかし、長岡藩だけは態度を明らかにしなかった。河井継之助は西洋式の兵法を採用し、ガトリング砲を配備した。強固な軍備を保ちながら、戦闘を避け武装中立を貫こうとしていた。

五月二日、継之助は小千谷の慈眼寺において新政府軍の岩村精一郎らに長岡藩の立場を説明したが、交渉は決裂し、開戦の意を固めた。恭順派を説き伏せ、奥羽越列藩同盟に加盟し、榎峠・朝日山で激しい攻防戦が展開された。新政府軍の信濃川渡河作戦により長岡城は落城する。

しかし、長岡藩兵は八町沖の渡河作戦を敢行し長岡城を奪還するなど、城を失っても戦意を保ち団結して長岡を守るべく戦った。



▲長岡城攻防絵図（長岡市立中央図書館所蔵）
長岡城が最初に落城した慶応４年（1868）５月19日を中心に７月29日の再落城までの戦況が描かれている。

▲長岡城奪還の長岡勢の行動（長岡市立中央図書館所蔵）
慶応４年（1868）５月19日、新政府軍の奇襲渡河攻撃によって長岡城は落城した。しかし長岡藩兵は見附方面に兵を終結させ作戦をたて、八町沖の沼地を渡って７月25日に長岡城を奪還した。この激戦で河井継之助も重傷を負った。

▲長岡藩五間梯子肩章（長岡市立中央図書館所蔵）
五間梯子は長岡藩主牧野氏の家紋の一つで旗指物や陣羽織などに使用された。

▲河井継之助（1827-1868）
河井継之助は陽明学を学び、家老となって藩政改革を行った。北越戊辰戦争では軍事総督として、長岡藩兵を率いて新政府軍に抗戦した。

▲復元されたガトリング砲（河井継之助記念館所蔵）
当時最新鋭の機関銃であったガトリング砲を河井継之助は２門購入し備えたが、軍事教育を施す時間がなく、十分に使いこなすことができなかった。

▲戊辰戦記絵巻物（長岡市立中央図書館所蔵）
長岡藩士で槍の名士であった伊東道右衛門は長岡城の落城の慶応４年（1868）５月19日に城岡の堤で戦死した。このとき62歳の老武者は槍で応戦したが、最後は新政府軍の銃弾に倒れた。戦死の地である長岡市城岡に碑が建てられている。

西暦	和暦	月日	記事
一八六八	慶応四	一・三	鳥羽・伏見の戦い（戊辰戦争開戦）
		一・七	長岡藩主牧野忠訓と藩兵が大坂を出発し、江戸へ
		二・七	崇徳館の教授たちが、新政府軍への恭順の意見書を藩に提出
		三・二十八	河井継之助、江戸より帰藩
		閏四・二十六	河井継之助、軍事総督となる
		五・二	長岡藩兵出兵し、摂田屋村の光福寺に本陣を配置
		五・十	河井が小千谷の慈眼寺で新政府軍の岩村軍監らと会見、会談決裂
		五・十九	旧幕府軍が新政府軍を激退、榎峠を占領
		七・二十五	長州藩兵と薩摩藩兵が城下に侵入し、長岡城落城
		七・二十九	長岡藩兵が八町沖を渡河して長岡城を奪還
		八・十六	新政府軍の総攻撃で長岡城が再度落城し、藩兵とその家族八十里越から会津へ
		八・	河井継之助、会津塩沢で戦傷死
			長岡民政局を設置
明治元		九・八	明治に改元
		九・九	山本帯刀ら会津飯寺にて戦死
		九・二十五	長岡藩が会津藩降伏後に謝罪降伏
		十二・二十二	新政府が牧野銳橘の相続を許可、長岡藩が再興

敵と味方の北越戊辰戦争
各地域の戦禍とその傷跡

北越戊辰戦争時、長岡市域は、旧幕府軍側の長岡藩、会津藩、桑名藩、新政府軍側の与板藩など、様々な勢力で構成されていた。長岡城をめぐる攻防戦は、戦禍を各地に拡げ、多くの建物が焼失した。また、地域のリーダー層や若者も、新たな時代の到来を予感し、戦禍をくぐり抜けて、それぞれ独自の行動を起こした。

▲明治元年越後大合戦略図（長岡市立中央図書館所蔵）
激しい戦闘は、慶応４年（1868）閏４月から同年８月初めの頃まで続いた。長岡城をめぐる攻防戦は、周辺地域を広く巻き込んだ。山野河海を問わず旧幕府軍と新政府軍は激闘を繰り広げた。

戦場となった長岡

現在の長岡市域では、北越戊辰戦争の主戦場として各地で激戦があった。新政府軍として戦った与板藩は、与板城はじめ城下町が炎上。新発田藩領だった中之島地域においても激戦があり、家屋の大部分が焼失した。和島地域では、島崎や村田付近で戦闘があった。戦争により甚大な被害を受けた長岡市域。戦後復興が後世に託された。

▲妙法寺の四脚門（黒門）（長岡市村田）
和島地域では、島崎の戦いはじめ各地で戦闘があった。村田付近の久田・方丈山の戦いでは妙法寺が焼失したが、この門は奇跡的に火災を免れた。二天門（赤門）とともに現存する。市指定文化財。

▲光正寺本堂（長岡市中之島）
中之島地域の大部分は新発田藩領だった。６月２日、今町・中之島で激戦があり、家屋の大部分が焼失した。光正寺本堂も焼失したが、明治 28 年（1895）に再建された。市指定文化財。

▲与板城切手門（長岡市与板町与板）
慶応４年（1868）３月、与板藩は新政府に恭順の意を示し、新政府軍として戦った。与板地域各地も戦場となり、５月 28 日、与板城郭が燃えたが、切手門は火災を免れた。明治４年（1871）に移築され、恩行寺表門となる。市指定文化財。

▲寺泊沖海戦で自爆した順動丸の錦絵（早稲田大学図書館所蔵）
幕府輸送船だった順動丸は、慶応４年（1868）５月 24 日、寺泊港碇泊中、新政府軍の艦船の砲撃にあい撃沈。浅瀬に乗り上げて自爆した。外輪部の推進機であるシャフト一対が現存している。

▶順動丸シャフト（市指定文化財、長岡市教育委員会所蔵）

動乱を生きた獅子たち

幕末の動乱は若者たちを飛躍させる。北越戊辰戦争時、自らの意志により行動した若者がいた。中之島地域の高橋竹之介らは、和島地域の池浦広太郎邸に参集し、方義隊（集義隊）を立ち上げ新政府軍として活動した。和島地域の久須美三郎もまた新政府軍に付いた。長く続いた幕藩体制が崩壊し、従来の秩序が混乱するなかで、主体的に行動した若者がいたことは注目される。彼らの多くは、来たる明治の世で足跡を残すことになる。

▶高橋竹之介（1842-1909）
中之島地域の杉之森出身。慶応４年（1868）２月、方義隊結成に参加。新政府軍側として北越戊辰戦争に参加した。

西暦	和暦	月日	記事
一八六八	慶応四	二・	坂谷の池浦広太郎邸で会談、方義隊結成
		三・十五	与板藩、新政府に恭順
		三・十七	小島谷村を治める旗本稲葉左衛門、新政府に恭順
		三・二十四	五十嵐伊織ら五人、勤皇活動のため出奔
		四・二十八	高橋竹之介ら、北越先鋒嚮導を拝命
		五・二十四	幕府輸送船順動丸、寺泊港で爆沈
		五・二十七	与板藩、旧幕府軍と金ケ崎で交戦
		五・二十八	第一次島崎の戦い
		五・	山県有朋・岩村精一郎、与板周辺を視察
		五～六	与板地域各地で交戦、与板城郭が焼失
		六・二	第二次島崎の戦い、多くの家屋が焼失
		六・二	今町・中之島で交戦、光正寺・大竹邸・永閑寺等が焼失
		六・	中之島地域各地で交戦
		六・	和島地域各地で交戦、多くの家屋が焼失
		七・	出雲崎民政局設置
		八・十六	稲葉左衛門、出雲崎民政局掛に就任
明治元		十・二十九	久須美三郎・池浦広太郎、民政局に登用される

米百俵の精神と国漢学校
未来をつくる、人をつくる

日本全体を二つに分けた戊辰戦争が終わった。旧幕府軍の諸藩は大幅な減禄にあい、戦後復興も思うように進まなかった。多くの人が戦争で疲弊し、町や村は戦火に巻き込まれて悲惨な状況だった。困窮を見かねた小林虎三郎は人材の育成こそが復興への足掛かりになると考えた。今に続く米百俵の精神の始まりである。

▲小川当知画「国漢学校の図」（『懐旧雑誌』、長岡市立中央図書館文書資料室所蔵）
従来の藩校は漢学だけを教えていたが、校名のように漢学だけでなく日本の歴史や国学も教え、士族だけでなく町人や農民にも入学の機会を与えた。

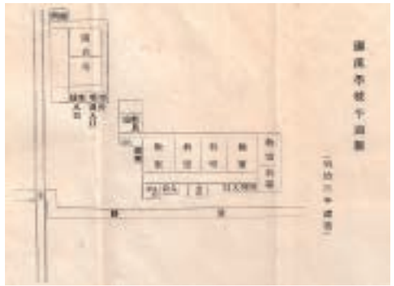
▶片山翠谷画「阪之上小学校」（「陳観帖」、長岡市立中央図書館所蔵）
国漢学校は阪之上小学校に引き継がれ、米百俵の精神は長岡市のまちづくりの指針や人材教育の理念となっている。

教育が国を興す

北越戊辰戦争後、城下一帯は焼け野原となった。石高を三分の一に減らされ、三度の食事にも事欠くような藩士もいた。小林虎三郎は三島億二郎とともに長岡藩の復興を担うことになった。新政府に対し救援を求めたが、その訴えは聞き入れられることはなかった。それぞれがその日を暮らしていくことで精一杯のなか、支藩三根山藩から救援米が届く。虎三郎は教育の大切さを説き、この米の売却金を使って学校に必要な教科書などの教材を整えることにする。

明治三年（一八七〇）六月十五日、念願の国漢学校が開校した。虎三郎の「国を興すものは教育である」という理念に基づいて多くの青少年に教育の機会をもたらし、米百俵の精神は長岡復興の原動力となった。

▲米百俵の群像（長岡市千秋、千秋が原ふるさとの森）
山本有三の戯曲「米百俵」を歌舞伎座で上演した一場面をブロンズ像で再現している。平成３年（1991）10月に建立された。



▲国漢学校平面図（長谷川津蔵編『創立五十周年記念号』）
国漢学校は、明治２年（1869）５月１日に四郎丸の昌福寺に仮校舎を開設。明治３年６月15日に坂之上町に新築開校した。

▲米百俵の碑（大手通２丁目交差点）
昭和50年（1975）８月、小林虎三郎没後99年の節目にあわせて国漢学校跡地の大手通りに設置された。

▲小林虎三郎(1828-1877)（興国寺所蔵）
23歳で洋学者佐久間象山に学び、優秀さを評価された。若くして藩校崇徳館の助教をつとめ、明治維新後には再興長岡藩大参事となる。長岡の教育を見据え、国漢学校の開校など人材教育の礎を築いた。病に苦しみ、晩年自らを「病翁」と称した。

西暦	和暦	月日	記事
一八六九	明治二	二・十五	長岡民政局が長岡藩の再興にともない脇野町に移転
		二・	長岡藩大参事の三島億二郎らが産物会所を設置
		二・	岸宇吉が自宅でランプ会を開催
		五・一	長岡藩が四郎丸村の昌福寺に国漢学校の仮校舎を開設
		六・二十二	版籍奉還、長岡藩知事に牧野忠毅就任
		九・	牧野頼母・三島億二郎・小林虎三郎が長岡藩大参事に就任
一八七〇	明治三	一・	長岡藩庁が新領の村々に「村方制法条々」を布達
		四・	三島億二郎、士族・卒族に養蚕に取り組むよう通達
		五・	三根山藩より長岡藩へ救援米が贈られる
		六・	三の丸を中心に長岡城跡の開墾が開始
		六・十五	国漢学校を坂之上町に移し新築開校
		十・	長岡藩が廃藩
		十・二十二	牧野忠毅が藩知事を辞任、長岡藩は柏崎県に合併

殖産興業への道程
歯をくいしばる明治の長岡人たち

日本の近代化は、殖産興業と富国強兵のスローガンのもと進められる。長岡でも学校・病院・銀行が開かれ、橋や鉄道が整備される。東山油田は最盛期を迎え、激動の時代を乗り越えようとする努力と気概は、新しい産業を生み出していく。北越戊辰戦争の復興から近代化へ。大きな目標を掲げて、人びとの活動が進んでいく。

▲金子山眠画「女紅場」（「陳観帖」、長岡市立中央図書館所蔵）
明治９年（1876）に三島億二郎が創設した養蚕や製糸・紡績の技術を女性たちに習得させる職業訓練学校。「陳観帖」は、明治11年の明治天皇の北陸巡幸時に製作された画文帳である。女性の活躍を重視し、殖産興業に結び付ける長岡独自の施策として、天皇の閲覧に供された。

▲外山脩造（1842-1916）
古志郡小貫村（栃尾地域）出身。衆議院議員。アサヒビール、阪神電鉄などを創業。関西経済界の基礎を築く。

▲山口権三郎（1838-1902）
刈羽郡横沢村（小国地域）出身。新潟県会議員。北越鉄道株式会社、長岡銀行、日本石油会社などを創設する。

▲三島億二郎（1825-1892）
再興長岡藩大参事、古志郡長などを歴任。長岡洋学校、長岡会社病院、第六十九国立銀行を開設する。

▲久須美秀三郎（1850-1928）
三島郡小島谷村（和島地域）出身。衆議院議員。北越鉄道、越後鉄道の創設に尽力し、「越後の鉄道王」と呼ばれる。

▲高橋九郎（1850-1922）
三島郡宮川外新田村（越路地域）出身。衆議院議員。県内初の信用組合を設立。旧別荘地は現在、「もみじ園」として親しまれている。

▲中川清兵衛（1848-1916）
与板城下出身。ドイツで醸造法を学んだ日本人初のビール醸造人。北海道の開拓使麦酒醸造所（サッポロビール㈱の前身）でビールを製造する。

▲東山油田の浦瀬鉱場（左）・中島製油所（右）（柏崎市立図書館所蔵）
油田の掘削は明治21年（1888）から始まる。明治35年から41年の最盛期には年間6,300kℓにのぼり、中島地区に運ばれ製油された。北越戊辰戦争からの復興と殖産興業を支えた。

油田と鉄道を事業化

明治期の長岡を支えたのは、明治維新の変革期を生き抜いた幕末生まれの明治人たちである。油田や鉄道など新しい産業に着目して会社を起こし、グローバルな視点で事業を展開する。

明治の長岡の人びとの足跡は、北越戊辰戦争後に生まれた人びとにも引き継がれ、商業会議所の設立や市制施行に向けた動きを後押ししていく。

▲長岡駅停車場（柏崎市立図書館所蔵）
明治31年（1898）に全通した北越鉄道（直江津―沼垂間）の駅舎。河川交通から鉄道へと物資の輸送方法を大きく転換し、工業都市化と市街地拡大が期待された。

西暦	和暦	記事
一八七二	明治五	大区小区制実施
一八七二	明治五	長岡洋学校開校
一八七三	明治六	長岡会社病院開院
一八七三	明治六	第一回徴兵検査実施
一八七三	明治六	柏崎県廃止（長岡は新潟県に）
一八七四	明治七	地租改正掛分局開局
一八七四	明治七	長岡・三条・新潟間に川蒸気船就航
一八七五	明治八	育英団体長岡社設立
一八七六	明治九	初代長生橋の有料通行開始
一八七六	明治九	女紅場開場
一八七七	明治十	西南戦争に長岡士族ら従軍
一八七八	明治十一	明治天皇北陸巡幸
一八七八	明治十一	第六十九国立銀行創設
一八七九	明治十二	三島億二郎、古志郡長就任
一八八一	明治十四	大日本農会長岡支会発足
一八八六	明治十九	北越殖民社設立
一八八六	明治十九	コレラ大流行
一八九〇	明治二十三	第一回衆議院議員選挙実施
一八九三	明治二十六	宝田石油株式会社創業
一八九六	明治二十九	大水害発生
一八九七	明治三十	赤痢大流行
一八九七	明治三十	関原葉煙草専売所設置
一八九八	明治三十一	北越鉄道（沼垂―直江津間）全通
一九〇四	明治三十七	北越水力電気組、長岡電灯所の事業吸収
一九〇五	明治三十八	長岡商業会議所設立
一九〇六	明治三十九	長岡市制施行（初代市長・牧野忠篤）
一九〇六	明治三十九	大口地内で天然ガス噴出
一九〇六	明治三十九	長岡郵便局内に電話交換局設置
一九〇七	明治四十	寺泊築港工事開始
一九一〇	明治四十三	与板橋完成
一九一〇	明治四十三	長岡市大煙火協会発足
一九一一	明治四十四	越後鉄道株式会社設立
一九一一	明治四十四	信濃川大洪水

長岡名所を全国発信！
絵葉書にみる大正モダン長岡

日清・日露戦争とデモクラシーの政治・経済情勢下で、現在の長岡市域でも市町村合併が進み、人びとは近代都市としての将来像を描き始める。長岡開府三百年祭でまちはにぎわい、互尊文庫・公会堂や悠久山公園など、大正モダンな雰囲気の「長岡名所」を活写した絵葉書が全国に発信されていく。

▶長岡名所「表町通り」（柏崎市立図書館所蔵）
通りの奥にみえる英国ルネッサンス様式に日本建築を融合させた六十九銀行本館は、大正５年（1916）10月に竣工。近代長岡を象徴する洋風建築の一つである。

◀大正記念長岡市立互尊文庫（長岡市立中央図書館所蔵）
大正天皇即位を記念して、野本恭八郎が建設・運営資金を長岡市に寄附。大正７年（1918）に開館式が挙行された。レンガ造り３階建て、開館初年度は５万3,000人の利用者があった。

▶長岡市役所の二代目庁舎（柏崎市立図書館所蔵）
大正10年（1921）７月に竣工（場所は国漢学校跡地）。ドイツ式鉄筋コンクリート２階建てタイル張り、入口には花崗岩を使用したモダンな建物である。

◀長岡市公会堂（柏崎市立図書館所蔵）
旅館王・大野甚松が創業50周年を記念して建設資金を寄附。大正15年（1926）、旧長岡城二の丸跡の宝田公園内に落成。「文化の殿堂」の誕生で中心市街地のにぎわいが生まれた。

絵葉書が伝える風景

明治三十三年（一九〇〇）、私製葉書の国内使用が認可されると、絵葉書ブームともいわれる発行の盛況期を迎えた。新しい商品や店舗、関東大震災の被害など、最新の情報を全国に発信していく。市役所、互尊文庫、公会堂、悠久山公園は長岡名所として、長岡開府三百年祭、大河津分水工事、栃尾郷大水害は地域の話題・出来事として全国に紹介されていった。

▲悠久山公園翠池（長岡市立中央図書館所蔵）
長岡商人を中心に組織された令終会が、長岡開府三百年祭を機に整備した。大正８年（1919）５月に完成し、桜の名所として現在も親しまれている。

▲長岡悠久山公園「桜花爛漫」（柏崎市立図書館所蔵）

▲長岡名物「仁和賀行列」（長岡市立中央図書館所蔵）
大正６年（1917）に開催された長岡開府三百年祭の仮装行列。市民は競うように通りを飾りつけ、門をつくるなど工夫をこらして雰囲気を盛りあげた。

▲信濃川分水工事（柏崎市立図書館所蔵）
明治42年（1909）に起工した工事は、大正11年（1922）に通水し、13年に竣工。多くの困難を乗り越えて完成した大河津分水は、信濃川流域の水害から新潟県を救った。

▲栃尾大水害（柏崎市立図書館所蔵）
大正15年（1926）７月に発生した大水害。大雨による刈谷田川の氾濫などで、死者・行方不明者87人の人的被害があった。

西暦	和暦	記事
一九一五	大正四	野口英世来岡
一九一六	大正五	長岡鉄道の西長岡－寺泊間開通
一九一六	大正五	栃尾鉄道の長岡－栃尾間開通
一九一六	大正五	第六十九国立銀行本館竣工
一九一七	大正六	長岡戊辰戦没諸士五十年祭開催
一九一八	大正七	長岡開府三百年祭開催
一九一八	大正七	大正記念長岡市立互尊文庫開館
一九一九	大正八	米騒動起こる
一九一九	大正八	悠久山公園完成
一九一九	大正八	刈谷田川改修工事着工
一九二一	大正十	長岡市役所新庁舎完成
一九二一	大正十	宝田石油・日本石油合併（本社東京移転）
一九二四	大正十三	大河津分水竣工
一九二五	大正十四	長岡市に都市計画法適用
一九二六	大正十五	長岡市歌制定（長岡市制施行二十周年）
一九二六	大正十五	長岡市公会堂落成
一九二六	大正十五	栃尾大水害
一九二六	大正十五	水道タンク完成
一九二六	大正十五	川口自由大学開講

日本海と太平洋は長岡が結ぶ
博覧会にかけた夢

満州事変が起きた昭和六年（一九三一）、上越線の全通を記念して長岡と寺泊を会場に博覧会が開催された。開通によって、長岡は東京と新潟、さらには太平洋と日本海・ロシアをつなぐ位置を占めるという自負のもと、二十余りの展示館が立ち並び、全国の産物と最新の技術を紹介した。

▲上越線全通記念博覧会 鳥瞰図（柏崎市立図書館所蔵）
上越線の宮内ー高崎間の全線開通を記念して、昭和６年（1931）８月 21 日から９月 30 日まで開催された博覧会。鳥瞰図は、博覧会会場から信濃川、遠く弥彦山、西山連峰を望む構図である。

▲中島浄水場
博覧会会場の一部となった水道タンクは、大正 15 年（1926）に完成した配水塔である。平成 10 年に国の登録有形文化財となり、ライトアップされるすがたは、市民のランドマーク的な存在となっている。

▲展示館「マジックアイランド」（長岡市立中央図書館所蔵）
エジプト調の外観で「魔法の国」として会場内で最も家族連れに人気があった。

▲寺泊第二会場ポスター（長岡市立中央図書館所蔵）
博覧会は、水道タンク付近を第１会場、寺泊水族博物館を第２会場として開催された。

▲手前に鉄橋となった長生橋と奥に木橋が見える（長岡戦災資料館所蔵）
鉄橋化された３代目長生橋は昭和９年（1934）１月着工、12 年 10 月完成。全長約 850 m、幅７ｍで、鉄骨を交互に組み合わせた 13 連トラスが特徴である。

▲野積橋竣工渡り初め（長岡市立科学博物館所蔵）
昭和６年（1931）竣工。大河津分水路開削に伴う最初の架橋となった。

博覧会後の長岡

長岡市は、昭和十年（一九三五）に「工業立市」を宣言して工業団地を造成。企業誘致に力を尽くし、戦時下の軍需増大も重なりまちは活気づいた。しかし、長引く戦争は市民生活に暗い影を落とし、博覧会にかけた人びとの夢と希望は、昭和二十年八月の長岡空襲、そして、敗戦という苦難の道をたどっていく。

▶山本五十六（1884-1943）
（山本五十六記念館所蔵）

▲山本五十六の遺影・遺骨を迎えて（長岡駅前）
連合艦隊司令長官に就任した山本五十六は、昭和 18 年（1943）４月 18 日にブーゲンビル島の上空を飛行中、米軍機に撃墜され戦死。同年６月８日、慰霊祭が県と市の共催で開催され、その死を悼んだ。

西暦	和暦	記事
一九二七	昭和二	関原地震発生
一九三〇	昭和五	黒川堤防決壊
一九三〇	昭和五	王番田小作争議起こる
一九三一	昭和六	上越線全通記念博覧会開催
一九三一	昭和六	野積橋完成
一九三二	昭和七	「愛国第11長岡号」記念飛行実施
一九三二	昭和七	長岡鉄道バス、長岡ー与板間運行開始
一九三四	昭和九	豪雪災害発生、渋海川氾濫
一九三五	昭和十	長岡市会で工業立市宣言 蔵王・城岡地区の工業団地造成事業着手
一九三六	昭和十一	火焔土器発見
一九三六	昭和十一	塩ノ入トンネル貫通
一九三七	昭和十二	ヘレン・ケラー来岡
一九三七	昭和十二	長生橋鉄橋化
一九四〇	昭和十五	大政翼賛会設立
一九四二	昭和十七	大日本国防婦人会長岡支部結成
一九四三	昭和十八	山本五十六連合艦隊司令長官戦死
一九四五	昭和二十	長岡空襲

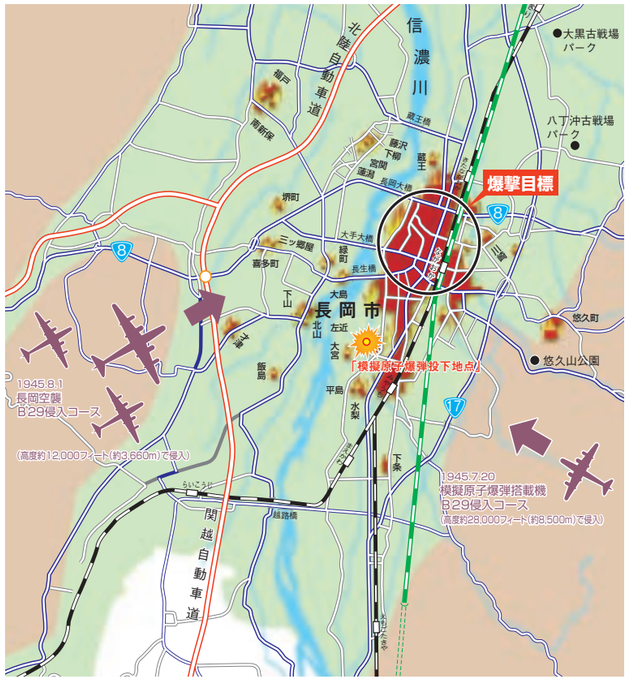
長岡空襲の記憶
昭和二十年の夏を忘れない

昭和二十年（一九四五）の暑い夏、長岡市は七月二十日の左近への模擬原子爆弾の投下、八月一日の空襲で大きな被害を受け、尊い市民の命が失われた。市街地は、戊辰戦争以来再び焼け野原となった。しかし、人びとは復旧に向けた槌音をあげ、戦災復興事業を官民あげて進めていった。

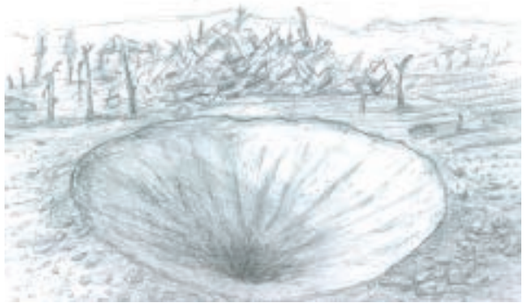
▲長岡空襲直後の中心市街地（長岡戦災資料館所蔵）
表町１丁目から長岡六十九銀行方面をのぞむ。

語り継ぐ長岡空襲

昭和二十五年（一九五〇）に開催された新潟県産業博覧会は、焼け野原から立ち上がる長岡を全国に発信する機会になった。昭和五十九年の非核平和都市宣言、平成十五年の長岡戦災資料館開館、同二十七年の「長岡市恒久平和の日」制定など、あの夏の日を忘れないという思いで、次世代に長岡空襲を語り継ぐ取り組みを続けている。



▲長岡市被災状況図（長岡戦災資料館『太平洋戦争と長岡空襲』を一部改変）
アメリカ軍のＢ 29 爆撃機の空襲によって市街地は大きな被害をうけ、現在わかっているだけで 1,486 人の市民が亡くなり、11,986 戸の家屋が焼失した。



▲今井雄介画「模擬原子爆弾落下による大穴」（長岡戦災資料館所蔵）

▲中村誠太郎画「友達を亡くす」（長岡戦災資料館所蔵）

▲長岡戦災資料館（長岡市城内町）
平成 15 年（2003）に開館。長岡空襲体験者がボランティアとして運営に協力。空襲体験を語る会の開催、空襲体験画や殉難者の遺影の収集・展示など、市民協働で長岡空襲を語り継いでいる。

▶母子像「懐（おも）い」（制作者／堀田正、長岡戦災資料館所蔵）
恒久平和を願う市内外の関係者が平成 17 年（2005）8 月 1 日に長岡市へ寄贈した。

▲新潟県産業博覧会（長岡博）鳥瞰図（長岡市立中央図書館所蔵）
昭和 25 年(1950) 7 月 20 日から 8 月 31 日まで 43 日間の会期で、県と市の共催で開催。長岡の戦災復興を内外にアピールし、科学と娯楽の最先端を市民に紹介した。

西暦	和暦	月日	記事
一九四五	昭和二十	五・十六	長岡市国民義勇隊結成
		七・二十	長岡市左近町に模擬原子爆弾投下
		七	建物強制疎開始まる
		八・一	長岡空襲、午後十時三十分（爆撃開始）
		八・二	午前〇時十分（爆撃終了）
		八・三	長岡市役所仮事務所を北越製紙本社内に設置
		八・四	緊急長岡市会開催
		八・七	罹災救護所を長岡国民学校などに設置
		八・十五	終戦
		八・二十	長岡市復興対策委員会設置
		八・二十三	第一回長岡市復興対策委員会開催
		九・一	長岡復興建設事務所設置
		九・十一	互尊文庫、第二書庫を仮図書館として開館
		九・二十九	第八代長岡市長・田村文吉就任
		十・六	長岡市内で洪水
		十・二十	県下戦災殉難者追悼法会挙行（栄涼寺）

高度経済成長の時代が到来
戦後復興と連続する自然災害との闘い

戦災復興を成し遂げ、高度経済成長期に入り、人びとの所得が倍増する。長岡地震、第二室戸台風、三八豪雪、新潟地震といった大規模な自然災害が発生する。大雪・地震・水害・台風などの連続する自然災害に遭うたびに、人びとは防災意識を高め、トンネルや橋などのインフラを整備していった。

▲昭和 30 年（1955）の長岡駅前と大手通り

▲越路橋開通記念写真（個人所蔵）
初代越路橋は昭和 34 年（1959）11 月に有料道路として開通。利用度を高めて産業の発展を図りたいという住民の要望に応えて県有化され、昭和 42 年2月に無料開放された。

▲中山隧道落成記念写真（個人所蔵）
昭和 8 年（1933）に始まった住民たちの手掘り隧道工事は、昭和 24 年に貫通。その苦闘のあゆみは映画「掘るまいか」で紹介され、平成 18 年度には土木学会選奨土木遺産に認定された。

▲市営スキー場オープン
昭和 48 年(1973)12 月にオープン。市街地から近く、レジャーブームで大勢のスキーヤーで賑わった。

▲威力を発揮する消雪パイプ
36 豪雪後に敷設され、38 豪雪で大活躍した。

災害を克服する

昭和三十年代の後半は自然災害が連続して発生した。昭和三十六年（一九六一）の三六豪雪、長岡地震（二月）、水害（六月・八月）、第二室戸台風（九月）、同三十八年の三八豪雪、同三十九年の新潟地震（六月）である。

人びとは防災対策を迅速に行うとともに、地下水を汲み上げて道路に散水する消雪パイプの発明やスキー場オープンによるスポーツ振興など、創意工夫と発想の転換によって自然災害を克服していった。

昭和 36 年（1961）に連続した自然災害

▲ 36 豪雪で大手通りに山となった雪

▲第２室戸台風の被害

▲水梨町地内の信濃川堤防損壊（６月）

▲長岡地震で全壊した家屋

▲ 8･20水害で市街地に濁流が(長岡市柳原町)

西暦	和暦	記事
一九四六	昭和二十一	県が長岡復興建設部設置
一九四六	昭和二十一	長岡復興祭開催（二十六年に長岡まつりと改称）
一九四七	昭和二十二	昭和天皇巡幸
一九四九	昭和二十四	中山隧道落成
一九五〇	昭和二十五	新潟県産業博覧会（長岡博）開催
一九五一	昭和二十六	長岡市立科学博物館開館
一九五一	昭和二十六	このころから各地域に土地改良区設立
一九五三	昭和二十八	復興都市計画事業完工
一九五四	昭和二十九	「長岡市政だより」試版号発行
一九五四	昭和二十九	栃尾市制施行
一九五五	昭和三十	長岡市役所新庁舎完成
一九五五	昭和三十	越路・三島・与板町制施行、和島村制施行
一九五六	昭和三十一	山古志村制・小国町制施行
一九五七	昭和三十二	寺泊町と大河津村合併
一九五八	昭和三十三	平潟神社境内に戦災殉難者慰霊塔完成
一九五八	昭和三十三	長岡厚生会館竣工
一九五九	昭和三十四	初代越路橋、有料道路として開通
一九六一	昭和三十六	三六豪雪・長岡地震・大水害・第二室戸台風
一九六一	昭和三十六	消雪パイプを試験的に敷設
一九六一	昭和三十六	長岡市議会が交通安全都市宣言決議
一九六三	昭和三十八	三八豪雪
一九六三	昭和三十八	長岡市議会が無雪都市宣言決議
一九六四	昭和三十九	新潟地震発生（新潟国体夏季大会中止）
一九六五	昭和四十	与板橋コンクリート橋化
一九六八	昭和四十三	長岡市郷土史料館開館
一九七〇	昭和四十五	長岡大橋開通
一九七一	昭和四十六	妙見浄水場通水開始
一九七三	昭和四十八	長岡ニュータウン建設計画発表
一九七三	昭和四十八	長岡市立劇場開館
一九七三	昭和四十八	長岡市営スキー場開設
一九七四	昭和四十九	小国和紙が国無形文化財に
一九七五	昭和五十	「米百俵之碑」除幕
一九七五	昭和五十	山古志村闘牛場完成（牛の角突き復活）
一九七五	昭和五十	越後七浦シーサイドライン全通

開通！高速道路と新幹線
高速交通網の広がり

昭和後期の長岡市政は「個性豊かな国際文化都市」をスローガンに、石油危機を乗り越え、北陸・関越高速自動車道と上越新幹線を核にした高速交通体系を整備する。人の移動も情報もスピード化し、様々な社会文化施設が整備されるなか、長岡のまちづくりが進んでいく。

▲「ながおか市政だより」№281・329
広報誌「ながおか市政だより」の表紙。昭和53年（1978）の北陸自動車道（長岡－新潟間）開通、昭和57年の上越新幹線開業を、「ハイウェー時代」と「新幹線時代」の幕開けと表現して発信した。

▲大手大橋開通式
昭和60年（1985）、市街地と川西地区を結ぶ念願の幹線動脈が開通した。

▲刈谷田川ダム完成
昭和55年（1980）、流域を度重なる水害が襲った刈谷田川上流にダムが完成した。

▲国道351号の新榎トンネル開通
昭和63年（1988）、長岡－栃尾間快速道路が全線開通。所要時間は半分になった。

▲中之島・見附インターチェンジ設置
昭和53年（1978）、北陸自動車道の新潟－長岡間の開通と同時に設置された。

個性豊かな国際文化都市をめざして

昭和六十二年（一九八七）十一月、長岡市とフォートワース市（アメリカ）の姉妹都市締結調印式が行われた。現在、長岡市の姉妹都市は、トリアー市（ドイツ）、ホノルル市（アメリカ）、ロマンモティエ・エンヴィー村（スイス）、フランス共和国領ポリネシア西タイアラプ連合村（タヒチ）を加えて五都市、友好都市はバンベルク市（ドイツ）と増えている。青少年交流や市民交流を積み重ね、長岡市の国際交流は着実に進んでいる。

▲フォートワース市議会議場での姉妹都市締結調印式
昭和62年（1987）11月9日、長岡市とフォートワース市（アメリカ）の姉妹都市締結調印式が行われた。市制80周年を迎えて国際交流を推進する長岡市初の姉妹都市である。

▲大竹邸記念館開館
昭和54年（1979）、大竹貫一（1860-1944）の生家を記念館として開館。刈谷田川改修や大河津分水工事の推進に尽力した近代政治家の足跡を紹介する。

▲おぐに森林公園開園
地域の豊かな自然を活かした林間公園として、昭和54年（1979）に開園。アスレチックやミニSLなどが整備され、家族連れでにぎわった。

▲長岡市制80周年記念事業「光と音の祭典」
昭和61年（1986）8月4日、シンセサイザー・レーザー光線と長岡花火の競演は、雨天のなか信濃川両岸に集まった12万人の観客を魅了した。

西暦	和暦	記事
一九七六	昭和五十一	長岡技術科学大学開学
一九七七	昭和五十二	長岡市役所新庁舎完成（幸町）
一九七八	昭和五十三	北陸自動車道の新潟－長岡間開通
一九七九	昭和五十四	大竹邸記念館開館
一九七九	昭和五十四	おぐに森林公園開園
一九八〇	昭和五十五	新長岡駅オープン
一九八〇	昭和五十五	刈谷田川ダム完成
一九八二	昭和五十七	上越新幹線の大宮－新潟間開業
一九八三	昭和五十八	寺泊水族博物館開館
一九八四	昭和五十九	非核平和都市を宣言
一九八五	昭和六十	大手大橋開通
一九八六	昭和六十一	長岡市制八十周年記念事業「光と音の祭典」
一九八六	昭和六十一	南部工業団地造成完了
一九八六	昭和六十一	国道八号線長岡バイパス全線開通
一九八六	昭和六十一	中之島町制施行
一九八七	昭和六十二	長岡市立中央図書館開館
一九八七	昭和六十二	フォートワース市と姉妹都市締結調印
一九八八	昭和六十三	ともしび運動スタート
一九八八	昭和六十三	中之島工業団地完成
一九八八	昭和六十三	国道三五一号の新榎トンネル開通

地域の個性が奏でる豊かなハーモニー
復興と振興、その先の未来へ

平成の時代を振り返るとき、「災害」、「合併」のフレーズが想起される。平成十六年（二〇〇四）に起こった七・一三水害、中越大震災は、災害復興と地域振興という課題を突きつけた。その後、三度の合併を経て、地域の個性が輝く新長岡市が誕生。新しい時代の扉が用意された。私たちは、先人に学び、未来へあゆみを進めていく。

▲復興祈願花火フェニックス
平成16年（2004）10月23日に中越大震災が発生。フェニックスの打上げは、震災の翌年から長岡まつり大花火大会の中で被災した多くの人々に元気と勇気を、全国の皆さんからの支援に対する感謝の気持ちを届けるためにスタートした。

忘れてはいけない「平成十六年」

七月十二日から降り続いた大雨は、大きな被害をもたらした。十三日、刈谷田堤防左岸が破堤し、中之島地区を濁流が飲み込んだ。新組・山本・富曽亀地区でも甚大な被害を出した。十月二十三日、川口地域を震源とした中越大震災が発生。山古志地域では全村避難、木籠集落の水没家屋など、全国を驚愕させた。この二つの大災害は、長岡に「復興」という言葉をもたらした。

▲7・13水害
濁流が中之島地域の中心部を襲い、甚大な被害をもたらした。

▲水没した木籠集落
山古志地域木籠集落には、中越大震災により水没した家屋が残っている。地震により地滑りが起き、川が堰き止められ、集落の約半分が水没した。

▲震央メモリアルパーク
中越大震災の震央の地である川口地域武道窪に整備された標柱。震央地の保存・継承の気持ち、そして「感謝の想い」を発信している。

平成の大合併、ふるさとが増えた

平成十七年（二〇〇五）四月一日の一次合併から始まり、その後二度の合併を経て、新長岡市が誕生した。この合併により、長岡市は豊かな自然と多様な地域資源を有する都市となった。個性あふれる十一の地域が、私たちのふるさととなった。これからも各地域の個性が輝き続けるよう、そして、私たちが長岡に住むことに「誇り」と「自信」を持つことができるよう、未来へ向かってしっかりあゆんでいきたい。

▲栃尾てまり

▲今町・中之島大凧合戦

▶ ECHIGO COUNTRY TRAIL
アジアトレイルマスターシリーズ国内2レース目に認定。小国地域～小千谷市を巡る。地域住民一丸で運営。地域振興のモデルケースとして注目される。

▲シティホールプラザ「アオーレ長岡」
平成24年（2012）4月1日オープン。全天候型の屋根付き広場「ナカドマ」を中心に、アリーナ、市民交流スペース、市役所が渾然一体に混ざり合う、全く新しい公共空間が生まれた。日本を代表する建築家・隈研吾による設計。

▲全日本丸太早切選手権大会
三島地域の特産である鋸で三島産の杉の丸太を切り落す速さを競う。姉妹都市ホノルルでも実演。

▲合併調印式（第1次合併）
平成17年（2005）、18年、22年と3度の合併を経て新長岡市が誕生した。

西暦	和暦	記事
一九九〇	平成二	八幡林遺跡から「沼垂城」など木簡出土
一九九一	平成三	全日本丸太早切選手権大会初開催
一九九四	平成六	長岡造形大学開学
一九九九	平成十一	道の駅R290とちおオープン
二〇〇四	平成十六	七・一三水害発生
二〇〇四	平成十六	中越大震災発生
二〇〇五	平成十七	長岡市と中之島町・越路町・三島町・山古志村・小国町が合併
二〇〇五	平成十七	震災復興祈願花火「フェニックス」打上げ
二〇〇六	平成十八	長岡市と和島村・寺泊町・栃尾市・与板町が合併
二〇〇六	平成十八	新長岡市歌「笑顔いきいき」制定
二〇〇六	平成十八	トリアー市と姉妹都市締結調印
二〇〇七	平成十九	中越沖地震発生
二〇〇九	平成二十一	NHK大河ドラマ「天地人」放送
二〇〇九	平成二十一	長岡南越路スマートIC開通
二〇〇九	平成二十一	トキめき新潟国体開催
二〇一〇	平成二十二	長岡市と川口町が合併
二〇一二	平成二十四	ホノルル市と姉妹都市締結調印
二〇一二	平成二十四	トキと自然の学習館オープン
二〇一二	平成二十四	シティホールプラザ「アオーレ長岡」オープン
二〇一三	平成二十五	フェニックス大橋と左岸バイパス開通
二〇一四	平成二十六	天皇皇后両陛下をお迎えし「全国植樹祭」開催
二〇一六	平成二十八	日本初の国際大会「越後カントリートレイル」開催
二〇一七	平成二十九	長岡北スマートIC開通
二〇一八	平成三十	長岡開府四〇〇年

次の百年へ　新しい米百俵
未来へ向けた人づくり・まちづくり

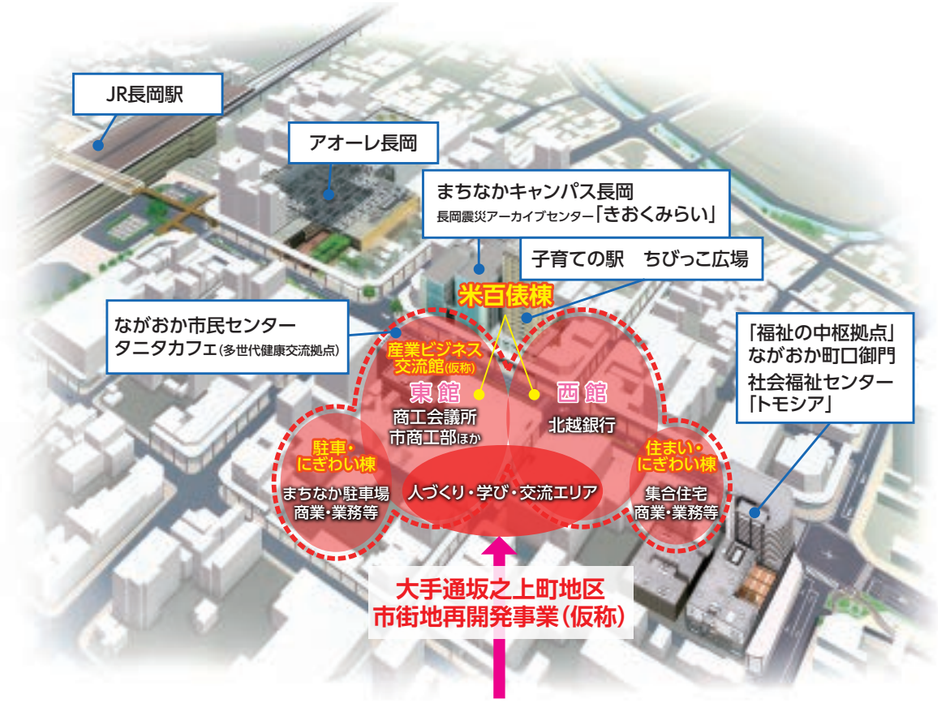
平成三十年に長岡開府四百年を迎えた長岡市は、米百俵のこころを受け継ぎ、次代を担う世代に積極的に投資し、ふるさとへの愛着と誇りを持った人材を育成するとともに、大きな時代の変化をとらえ将来に向けた基盤を整備し、次の百年に向けた人づくり・まちづくり＝「新しい米百俵」を進めている。

長岡版イノベーション

長岡のあらゆる産業や事業活動に、市内三大学一高専の英知を活かして活性化を促すとともに、新たなビジネス創造に向けた環境の整備を行う。

また、市民ニーズを的確に捉え、新技術などを取り入れ最適な行政サービスを目指す取り組みや、時代が求める知識や技能などを学ぶ場の創出など、大きな時代の変化を捉えた市民生活の向上を図っていく。

▲ NaDeC 構想
市内3大学1高専が、長岡版イノベーションの実現に向け連携して人材育成や産業振興に取り組む
※ Nagaoka Delta Cone の頭文字を取ったもの



～「人づくり」と「産業振興」を総がかりで支える地方創生の拠点～
米百俵プレイス(仮称)

人づくり・産業振興を総がかりで支える地方創生の拠点整備

大手通坂之上町地区の市街地再開発事業で建設する「米百俵プレイス（仮称）」に「人づくり・学び・交流エリア」を整備する。未来の人づくりと知の創造拠点となる新しいスタイルの図書館や、産業を興す人材の育成と市内三大学一高専のイノベーション拠点となる機能を整備し、長岡の歴史や文化・まちづくりの精神で新たな価値を創造していく。

▲「米百俵プレイス（仮称）」は、子ども・産業人・利用者が互いに刺激し合う開放的な空間に。施設の随所にある本が各機能をつなぐ

次代の長岡を支える人材の育成

長岡市民の心に息づく米百俵の精神で、質の高い教育と教育環境の整備を進め、未来の長岡を背負って立つ人を育てる。子どもたちに、さまざまな熱中・感動体験を通して夢を描き、志を立てる力と生き抜く自信を育み、長岡への愛着と誇りを持った人材の育成を目指している。

▲熱中！感動！体験の充実　阪之上小学校英語劇「米百俵」

▲子育て環境のさらなる充実
日本初！長岡発！の「子育ての駅」は世代を超えた交流の場

▲平和のバトンを未来へ
姉妹都市ホノルル市（アメリカ）との青少年交流

協働によるまちづくりと長岡の魅力発信

市民協働・交流のシンボル「アオーレ長岡」などを拠点に、市民が取り組むまちの魅力づくりを推進。二〇二〇東京オリンピック・パラリンピックに向けて、スポーツの振興にも取り組んでいる。また、姉妹都市等との交流機会の拡大、世界に羽ばたく人材の育成とともに、交流人口の増加を図っている。さらに、長岡花火をはじめ火焔土器や錦鯉、日本酒、米などの地域資源の魅力を広く国内外に発信し、「長岡ファン」の拡大を目指している。

▲市民協働によるまちづくり
若者がまちづくりを議論し、企画実施するながおか若者会議

▲長岡の宝　世界に発信「火焔土器」・「錦鯉」
（左）長岡の火焔型土器がロンドン（イギリス）の大英博物館で展示され世界を魅了。
（右）美しい錦鯉を求めて海外から大勢の愛好家・バイヤーが「聖地」長岡を訪れ、高い評価を得ている。

長岡市年表

	西暦	和暦	長岡の出来事	日本の出来事	世界の出来事
原始	一六,〇〇〇年前		細石刃文化拡大(荒屋遺跡)		
	五,〇〇〇年前		火焔土器誕生(馬高遺跡・岩野原遺跡)		
	三,〇〇〇年前		東北地方から亀ヶ岡文化伝播(藤橋遺跡・朝日遺跡)		
	紀元前三世紀ころ		米づくり伝播(尾立遺跡)		
	四世紀ころ～		このころ、古墳が造営される		
古代	六四七・六四八	大化三・四	渟足柵・磐舟柵設置	紀元 倭の奴国の使者印綬を受ける	
	六八九～六九二	持統三～六	越国が越前・越中・越後に三分割	二〇〇頃 邪馬台国女王卑弥呼が魏に遣使	一〇〇頃 ローマの領域最大となる
	七世紀末ころ		横滝山廃寺がこのころ造営		
	七〇二	大宝二	頸城・魚沼・古志・蒲原の四郡が越中国から越後国に編入	六三〇 第一回遣唐使	五八九 隋、中国を統一
	七一七～七二四	養老元～八	「沼垂城」と書かれた木簡が廃棄(八幡林遺跡)	六四五 乙巳の変	六一八 唐興る
	九二七	延長五	『延喜式』に式内社古志郡六座が記載	六四六 改新の詔	
	九六七	康保四	『延喜式』に郡名「古志」「蒲原」確認		
	一〇〇〇～一二〇〇	康和二～正治二	古志郡に大島荘・紙屋荘・志度野岐荘・白鳥荘・吉河荘・太田保・高波保などの荘園・国衙領を確認	七一〇 平城京に遷都	
	一二七一	文永八	鎌倉幕府を批判した罪で日蓮が寺泊を経て佐渡に配流	七九四 平安京に遷都	九六二 神聖ローマ帝国成立
中世	一三五五	正平十・文和四	南北朝の両軍が蔵王堂などで激戦		
	一四三四	永享六	世阿弥元清が寺泊を経て佐渡に配流	一〇八六 白河上皇、院政をはじめる	
	一五四八	天文十七	上杉謙信(長尾景虎)が栃尾城から春日山城に移動	一一九二 源頼朝、征夷大将軍となる	
	一五七八	天正六	御館の乱	一三三四 建武の新政	一〇九六 第一回十字軍
	一五九八	慶長三	上杉景勝、会津に移封	一三九二 南北朝の合一	一二〇六 チンギス・ハーン、モンゴルを統一
	一六〇五～一六一〇	慶長十～慶長十五	堀直奇が長岡城とまちづくり推進、このころ「長岡」という地名が初めて確認	一四六七 応仁の乱はじまる	一二七五 マルコ・ポーロ、元に仕える
	一六一六	元和二	堀直奇が信濃飯山に移封、長岡城には高田藩主松平忠輝の重臣山田勝重が在番	一五八二 本能寺の変	一四九二 コロンブス、アメリカに到達
	一六一八	元和四	堀直奇が越後本庄(村上)へ転封、牧野忠成が初代長岡藩主となる	一五九〇 豊臣秀吉、全国統一完成	一五一七 ルターの宗教改革
				一六〇〇 関ヶ原の戦い	一五一九 マゼランの世界周航
近世	一六二五	寛永二	長岡藩の知行高が七万四千石となる	一六〇三 徳川家康、征夷大将軍となる	一六〇〇 東インド会社設立
	一六二五	寛永二	蔵王権現社別当安禅寺、上野寛永寺末寺となる	一六一五 大坂夏の陣、豊臣氏滅亡	
	一六四二	寛永十九	長岡船道、幕府の認可取得		
	一六五一	慶安四	このころ、福島江完成		
	一六五九	万治二	このころ、大坂屋三輪家、与板へ移住		
	一六六七	寛文七	武石村庄屋難波小右衛門、蔵米を窮民に分与した罪で斬首		
	一六七七	延宝五	妙法寺本堂前に黒門建立		
	一六八一	延宝九	牧野忠辰、高田藩主改易に際し、高田城受け取り		
	一七〇四	宝永元	刈谷田川・猿橋川洪水		
	一七〇六	宝永三	井伊直矩、初代井伊与板藩主となる		
	一七〇六	宝永三	塚野山村大火、長谷川邸焼失		
	一七一三	正徳三	与茂七騒動		
	一七一五	正徳五	蔵王権現社、現金峯神社の地に移築		
	一七一六	享保元	長谷川邸再建		
	一七一七	享保二	住雲園築庭		
	一七二八	享保十三	長岡町大火(三蔵火事)発生		
	一七四三	寛保三	栃尾町の秋葉権現、遠江国の秋葉三尺坊と本末争い	一六三七 島原の乱	一六四二 ピューリタン革命
	一七五四	宝暦四	長岡城本丸(三蔵火事で焼失)を再築		
	一七七一	明和八	牧野忠辰に蒼柴大明神の神号を贈進		
	一七七一	明和八	白山媛神社神殿・拝殿建立		
	一七八一	天明元	悠久山に蒼柴大明神(牧野忠辰神号)社殿建立		
	一七八六	天明六	幕府、脇野町代官所設置		
	一七九〇	寛政二	このころ、栃尾織物発展の礎となる栃尾縞紬創始		
	一七九二	寛政四	岡村権左衛門騒動		
	一八〇一	享和元	第九代長岡藩主牧野忠精、老中に就任		
	一八〇四	文化元	与板藩主井伊直朗、城主格となる	一六八七 生類憐れみの令	
	一八〇四	文化元	木喰上人、真福寺に滞在し仁王尊など制作		
	一八〇八	文化五	長岡藩校崇徳館開校	一七〇七 富士山宝永噴火	
	一八一三	文政六	与板城完成		
	一八二八	文政十一	文政の大地震発生	一七一六 享保の改革	
				一七八二 天明の飢饉	一七七五 アメリカ独立戦争
				一七八七 寛政の改革	一七八九 フランス革命、人権宣言
					一八〇四 ナポレオン、帝位につく

	西暦	和暦	長岡の出来事	日本の出来事	世界の出来事
近世	一八三〇	天保元	栃尾で炭一揆発生		
	一八三二	天保二	良寛、島崎村の木村家で病没	一八三三　天保の飢饉	
	一八三五	天保六	真心尼、「連の露」を完成	一八三七　大塩平八郎の乱	
	一八四〇	天保十一	幕府、長岡藩に川越転封（三万領知替え）を命令		一八四〇　アヘン戦争
	一八四一	天保十二	三万領知替え中止となる	一八四一　天保の改革	
	一八四二	天保十三	脇野町鍔の祖・中屋庄兵衛開業		
	一八四三	天保十四	幕府、長岡藩に新潟町の上知を命令	一八五三　浦賀にペリー来航	
	一八四三	天保十四	第十代長岡藩主牧野忠雅、老中に就任	一八五四　日米和親条約	
	一八四四	弘化元	長岡町大火（俊治火事）、城下町がほぼ焼失	一八五八　日米修好通商条約	一八五三　クリミア戦争
	一八六〇	万延元	漢学者遠藤軍平、入軽井に西軽塾開校	一八六〇　桜田門外の変	
	一八六〇	万延元	与板藩校正徳館開校		
	一八六一	文久元	中之島組大庄屋大竹英治、郷校済美堂開校		一八六一　南北戦争
	一八六三	文久三	第十一代長岡藩主牧野忠恭、老中に就任		
	一八六四	元治元	石川雲蝶作欄間「四面」、林興庵に寄進		
	一八六七	慶応三	河井継之助、長岡藩家老に就任	一八六七　大政奉還、王政復古の大号令	
	一八六七	慶応三	長岡藩、長岡船道を廃止		
	一八六八	慶応四	戊辰戦争開戦、長州藩兵と薩摩藩兵が城下に侵入し、長岡城落城	一八六八　戊辰戦争	
	一八六八	慶応四	長岡藩兵が八町沖を渡河して長岡城を奪還		
	一八六八	慶応四	新政府軍の総攻撃で長岡城が再度落城し、藩兵とその家族は八十里越から会津へ		
	一八六八	慶応四	河井継之助、会津塩沢で戦傷死		
	一八六八	明治元	新政府が牧野鋭橘（忠毅）の相続を許可（再興長岡藩）		
近代	一八七〇	明治三	国漢学校、新築開校	一八七一　廃藩置県	
	一八七六	明治九	長生橋の有料通行開始	一八七七　西南戦争	
	一八七八	明治十一	明治天皇北陸巡幸		
	一八七八	明治十一	第六十九国立銀行開業		
	一八七九	明治十二	三島億二郎、古志郡長となる		
	一八九三	明治二十六	宝田石油株式会社創業	一八八九　大日本帝国憲法発布	
	一九〇六	明治三十九	長岡市制施行	一八九〇　第一回帝国議会	
				一八九四　日清戦争	
	一九一一	明治四十四	越後鉄道株式会社設立	一八九五　下関条約調印、三国干渉	一九一一　辛亥革命
	一九一七	大正六	長岡開府三百年祭開催	一九〇四　日露戦争	一九一二　中華民国成立
	一九一八	大正七	大正記念長岡市立互尊文庫開館		一九一四　第一次世界大戦
	一九一九	大正八	悠久山公園完成		一九一九　五・四運動、ヴェルサイユ条約
	一九二四	大正十三	大河津分水竣工	一九二五　普通選挙制	一九二〇　国際連盟発足
	一九二六	大正十五	栃尾大水害		
	一九二六	大正十五	水道タンク完成		
	一九二六	大正十五	川口自由大学開講		一九二九　世界恐慌
	一九三一	昭和六	上越線全通記念博覧会開催	一九三一　満州事変	一九三三　アメリカ、ニューディール政策開始
	一九三七	昭和十二	長生橋鉄橋化	一九三三　国際連盟脱退	一九三九　独ソ不可侵条約、第二次世界大戦
	一九四三	昭和十八	山本五十六連合艦隊司令長官戦死	一九三六　二・二六事件	一九四一　大西洋憲章、独ソ戦争
	一九四五	昭和二十	左近町に模擬原子爆弾投下	一九四〇　日独伊三国同盟	一九四五　ヤルタ会談、ポツダム会談、国際連合発足
	一九四五	昭和二十	長岡空襲	一九四一　太平洋戦争	
現代	一九四九	昭和二十四	中山隧道落成	一九四五　広島・長崎に原子爆弾投下 一九四五　ポツダム宣言受諾	一九四九　北大西洋条約機構、中華人民共和国成立
	一九五〇	昭和二十五	新潟県産業博覧会開催	一九四六　日本国憲法公布	一九五〇　朝鮮戦争
	一九六一	昭和三十六	三六豪雪・長岡地震・大水害・第二室戸台風の被害発生	一九五一　サンフランシスコ講和条約	
	一九六三	昭和三十八	三八豪雪発生	一九五六　国際連合加盟	
	一九七九	昭和五十四	大竹邸記念館開館	一九六四　東京オリンピック	
	一九七九	昭和五十四	おぐに森林公園開園	一九七二　沖縄の本土復帰	
				一九七八　日中平和友好条約	
	一九八〇	昭和五十五	刈谷田川ダム完成		一九八〇　イラン・イラク戦争
	一九八六	昭和六十一	長岡市制八十周年記念事業「光と音の祭典」開催		
	一九八七	昭和六十二	フォートワース市が長岡市初の姉妹都市に	一九九五　阪神・淡路大震災	一九九〇　東西ドイツ統一
	二〇〇四	平成十六	七・一三水害発生	一九九八　長野オリンピック	一九九一　湾岸戦争
	二〇〇四	平成十六	中越大震災発生		二〇〇一　アメリカ同時多発テロ
	二〇〇五	平成十七	長岡市と中之島町・越路町・三島町・山古志村・小国町が合併		
	二〇〇五	平成十七	震災復興祈願花火「フェニックス」打上げ		
	二〇〇六	平成十八	長岡市と和島村・寺泊町・栃尾市・与板町が合併		
	二〇〇七	平成十九	中越沖地震発生		
	二〇一〇	平成二十二	長岡市と川口町が合併	二〇一一　東日本大震災	
	二〇一二	平成二十四	シティホールプラザ「アオーレ長岡」オープン	二〇一三　富士山、世界文化遺産に	
	二〇一八	平成三十	長岡開府四〇〇年記念事業開催	二〇一三　二〇二〇オリンピック開催地に東京が決定	

※時代区分は『長岡市史』通史編による

主な参考文献（発行年順）

長谷川津藏　『創立五十周年記念号』　阪之上小学校五十周年祝賀会　大正十二年
今泉鐸次郎　『河井継之助伝』　目黒書店　昭和六年
長岡市役所　『長岡市史』　昭和六年
今泉省三　『長岡の歴史』全六巻　野島出版　昭和四十三～四十七年
新潟県立長岡中学校　『長岡中学読本』　新潟県立長岡高等学校同窓会　昭和五十一年
小国町史編集委員会　『小国町史』本文編　昭和五十一年
新潟日報事業社　『新潟県大百科事典』上・下巻　昭和五十二年
栃尾市史編集委員会　『栃尾市史』上・中・下巻　栃尾市役所　昭和五十二～五十五年
三島町史編集委員会　『三島町史』上・下巻　三島町　昭和五十九年
山古志村史編集委員会　『山古志村史』通史　山古志村役場　昭和六十年
川口町史編さん委員会　『川口町史』　川口町　昭和六十一年
中之島村史編纂委員会　『中之島村史』上・下巻　中之島村　昭和六十一～六十三年
長岡市　『ふるさと長岡のあゆみ』　昭和六十一年
北越戊辰戦争と長岡展示運営委員会　『北越戊辰戦争と長岡』「北越戊辰戦争と長岡」頒布会　平成元年
栃尾市教育委員会　『栃尾と人物』　平成四年
寺泊町　『寺泊町史』　通史編　上・下巻　平成四年
長岡市史編集委員会　長岡市史双書No.34　『小林虎三郎の求志洞遺稿』長岡市　平成七年
長岡市史編集委員会　長岡市史双書No.35　『長岡懐旧雑誌』長岡市　平成八年
長岡市　『長岡市史』　通史編　上・下巻　平成八年
中之島町　『歴史年表　中之島町』　平成八年
和島村　『和島村史』通史編　平成九年
長岡市　『ふるさと長岡の人びと』　平成十年
与板町　『与板町史』通史編　上・下巻　平成十一年
新潟県立歴史博物館　『新潟県立歴史博物館　常設展示図録』　平成十二年
越路町　『越路町史』通史編　上・下巻　平成十三年
稲川明雄　『長岡藩』　現代書館　平成十六年
長岡市　『長岡歴史事典』　平成十六年
長岡市立中央図書館文書資料室　長岡市史双書No.44　『長岡城之面影』長岡市　平成十七年
与板町教育委員会　『与板のひとびと―与板の人物誌』　平成十七年
長岡市　『長岡市政100年のあゆみ』　平成十八年
長岡戦災資料館　『太平洋戦争と長岡空襲』　平成十八年
続栃尾と人物編集委員会　『続　栃尾と人物』　平成十九年
長岡市米百俵財団　『米百俵　その先の未来へ』　平成二十年
長岡市　『郷土長岡を創った人びと』平成二十一年
豊川市桜ケ丘ミュージアム　『三河に興りし牧野一族』　平成二十一年
新潟県立歴史博物館　『越後の大名』　平成二十三年
長岡市　『語りつぐ長岡空襲―長岡戦災資料館十周年記念誌―』　平成二十五年
長岡市教育委員会　『長岡の文化財』　平成二十六年
長岡市地域振興戦略部　『新長岡市10年の歩み』　平成二十七年

長岡開府四〇〇年のあゆみ ©

平成30年5月27日　発行

発行　長岡開府400年記念事業実行委員会
（事務局：長岡市政策企画課開府400年記念事業推進室内）
〒940-8501　新潟県長岡市大手通1-4-10
電話　0258-35-1122（代表）
主管　長岡市教育委員会（長岡市立中央図書館、長岡市立科学博物館）
印刷　吉原印刷株式会社

長岡開府400年

ROOTS 400

越後長岡